概況

平成三十年（二〇一八）の歌舞伎界

小玉祥子

歌舞伎界最大の話題は、二代目白鸚、十代目幸四郎、八代目染五郎の高麗屋三代の襲名であろう。一、二月の歌舞伎座を皮切りに、建て替えのため閉場中であった名古屋の御園座の柿落とし、博多座、大阪松竹座、耐震補強工事中であった京都の南座の柿落としと日本各地の主要劇場をめぐった。初代白鸚、九代目幸四郎、七代目染五郎の高麗屋三代襲名は一九八一年。その時、初代白鸚の体調は万全ではなかったが、二代目白鸚は七十代にして技芸とも充実の最中で、四十代の幸四郎とも、大役を次々と演じた。また十代の染五郎は多くのメディアで取り上げられ、人気者となった。

一年を通して歌舞伎座百三十年と冠された。一、二月は、三代の襲名披露興行で、一月は、坂田藤十郎、吉右衛門、梅玉らの大幹部から愛之助、猿之助、勘九郎、七之助らの花形までが顔をそろえた。襲名披露狂言は昼が「菅原伝授手習鑑」。松王丸は「車引」が幸四郎、「寺子屋」が白鸚。幸四郎は荒事らしい強さがあり、白鸚は首実検に緊迫感を出した。勘九郎の梅王丸、七之助の桜丸、梅玉の源蔵、魁春の千代。夜の披露狂言は「勧進帳」。幸四郎の弁慶に義経を守ろうという必死の思いが感じられ、吉右衛門の富樫が弁慶の攻めを自在にうけた。染五郎は義経で気品があった。ほかに昼は「箱根霊験誓仇討」「七福神」、夜は「角力場」「口上」「相生獅子」「三人形」。

二月は坂田藤十郎、菊五郎、吉右衛門、仁左衛門、梅玉、玉三郎、松緑、菊之助、海老蔵。幸四郎は昼に「一条大蔵譚」の大蔵卿、夜に「熊谷陣屋」の熊谷直実を演じた。大蔵卿には哀しさとりりしさがあり、熊谷ではわが子への思いを示した。時蔵の常盤御前、松緑の鬼次郎、孝太郎のお京、魁春の相模、菊五郎の義経、雀右衛門の藤の方。白鸚は夜の「仮名手本忠臣蔵七段目」で由良之助を演じ、染五郎が力弥で共演。平右衛門とお軽を奇数日が仁左衛門、玉三郎、偶数日は海老蔵、菊之助が勤めた。ほかに昼が「春駒祝踊高麗」「暫」「井伊大老」、夜が「口上」の代わりの「芝居前」。

三月は仁左衛門、玉三郎に中堅、花形が加わった。昼は序幕が「国性爺合戦」で、愛之助の和藤内、芝翫の甘輝、扇雀の錦祥女、秀太郎の渚、東蔵の老一官と適役が揃った。中幕が四代目雀右衛門七回忌追善狂言の「男女道成寺」で雀右衛門が花子で愛らしさを表現。松緑の狂言師左近。最後が「芝浜」。芝翫の政五郎と孝太郎のおたつが世話物らしい味わい。夜は最初が「お染の七役」で「小梅莨屋」「瓦町油屋」のみの上演。仁左衛門の鬼門の喜兵衛、玉三郎の土手のお六という名コンビの復活。続く「神田祭」では仁左衛門が鳶頭、玉三郎が芸者。最後が「滝の白糸」。新派の名作の歌舞伎化で玉三郎の監修。壱太郎の白糸が初々しく、松也が欣弥で法廷の場面に説得力を出した。

四月は菊五郎、仁左衛門が中心。昼の「西郷と勝」は真山青果作。松緑の西郷、錦之助の勝。「裏表先代萩」では菊五郎が小助と仁木を二十三年ぶりに演じ、世話と時代の悪の香りを発散し、時蔵の政岡が若君を守ろうとする毅然さとわが子の死骸を前にしての悲しみの両面を出した。夜が鶴屋南北作「絵本合法衢」の通し。仁左衛門が大名の一門の大学之助と町人の太平次で悪の魅力を見せた。

五月は十二世團十郎没後五年祭の「團菊祭大歌舞伎」。昼は「雷神不動北山桜」の通しで、海老蔵が早雲王子、安倍清行、粂寺弾正、鳴神、不動の五役。最後に時蔵の「女伊達」。夜が「弁天娘女男白浪」で「浜松屋」から「滑川

土橋」まで。菊五郎が弁天小僧で時代と世話を使い分ける緩急自在な台詞術を見せた。左團次の南郷、菊之助の赤星、松緑の忠信、海老蔵の駄右衛門。中幕が「菊畑」で時蔵の虎蔵にきびきびとしたところと色気があり、松緑の智恵内、児太郎の皆鶴姫、團蔵の鬼一と揃った。最後が菊之助の「喜撰」。

六月は昼の序幕が時蔵のお三輪が好演の「三笠山御殿」。松緑の鱶七。中幕が菊之助の「文屋」で動きが美しい。最後が「野晒悟助」。菊五郎が悟助でさっそうとしたところを見せた。夜が「夏祭浪花鑑」。吉右衛門の団七が妻子への情を出した。菊之助のお梶、雀右衛門のお辰、歌六の三婦、錦之助の徳兵衛、橘三郎の義平次ら周囲も揃った。次が宇野信夫作「巷談宵宮雨」。芝翫が金に強い執着を持つ老人の龍達を愛きょうたっぷりに演じた。松緑の太十、雀右衛門のおいち、児太郎のおとらがそれぞれ好演で、見ごたえのある舞台。

七月は海老蔵が中心。昼が「三国無雙瓢箪久　出世太閤記」。太閤記物の再構成で光秀の謀反から秀吉が天下を取るまで。海老蔵が秀吉、獅童が光秀と左馬之助の二役。夜が今井豊茂作「源氏物語」。海老蔵が光源氏、龍王を演じ、能楽のシテ方、狂言方、オペラ歌手が出演し、宙乗りもある実験的な公演。

八月は扇雀、幸四郎、猿之助、獅童、七之助、中車、弥十郎らが出演の三部制の納涼歌舞伎。一部の最初が北條秀司作「花魁草」。扇雀のお蝶が傷を持つ女性の悲しみを描き、獅童の幸太郎がいちずさを出した。中幕が「龍虎」。幸四郎の龍、染五郎の虎。最後が「心中月夜星野屋」。落語の「星野屋」が原作の小佐田定雄脚本の新作。七之助のおたかがしたたかであだっぽく、獅童の母お熊、中車の星野屋が好演。二部が戸部和久脚本、猿之助演出・脚本の「東海道中膝栗毛」。幸四郎の弥次郎兵衛、猿之助の喜多八。次が「雨乞其角」。扇雀の俳人其角。三部が「盟三五大切」の通し。源五兵衛の幸四郎が後半で不気味さを出した。七之助の小万、獅童の三五郎。

九月は吉右衛門が主軸の「秀山祭」。吉右衛門は昼に「河内山」、夜に「俊寛」というあたり役の二役で優れた演技を見せた。昼はほかに「金閣寺」。松緑の大膳、梅玉の東吉で児太郎が雪姫に抜擢され、期待に応えた。病気療養中であった福助が慶寿院尼で復帰。「鬼揃紅葉狩」は幸四郎の更科の前実は戸隠山の鬼女。夜はほかに幸四郎が「操り三番叟」、玉三郎が新作舞踊「幽玄」で「羽衣」「石橋」「道成寺」を太鼓集団鼓童の演奏で、若手俳優と踊った。

十月は十八世中村勘三郎七回忌追善。勘九郎、七之助と白鸚、仁左衛門、玉三郎。勘九郎は昼の舞踊「大江山酒呑童子」で酒呑童子、白鸚が宗吾の「佐倉義民伝」で徳川家綱、夜は「吉野山」で玉三郎の静御前を相手に佐藤忠信実は源九郎狐を踊り、「助六」では仁左衛門の助六で、白酒売新兵衛。七之助は昼の「三人吉三」のお嬢吉三、「佐倉義民伝」のおさん、夜は「助六」の揚巻を初役で勤めた。ほかに夜は「宮島のだんまり」。

十一月は顔見世で、菊五郎、吉右衛門、時蔵、雀右衛門、松緑、猿之助。夜の「楼門五三桐」で、吉右衛門が五右衛門、菊五郎が久吉で大歌舞伎というにふさわしい舞台ぶり。昼の最初が川口松太郎作「お江戸みやげ」。時蔵のお辻と又五郎のおゆうがいい取り合わせ。次が「素襖落」で松緑の太郎冠者。最後が「十六夜清心」で菊五郎の清心が心情の変化を巧みに見せ、時蔵の十六夜が清心への強い思いを感じさせた。吉右衛門の白蓮は底知れなさを出した。夜はほかに雀右衛門の「文売り」、猿之助の「法界坊」。

十二月は玉三郎、松緑と若手の一座。話題となったのが夜の「阿古屋」。阿古屋が玉三郎のAプロと梅枝、児太郎が交互に演じるBプロに分かれての上演。梅枝、児太郎は玉三郎が指導。昼は玉三郎監修で「お染の七役」が壱太郎の七役で通し上演。玉三郎から花形世代に芸が継承された。ほかに昼は「幸助餅」で、松也の幸助、中車の関取雷五郎吉。ほかに夜は「あんまと泥棒」で松緑の泥棒権太郎、中車のあんま秀の市が絶妙な掛け合い。最後はAプロが梅枝、児太郎による「二人藤娘」、Bプロが玉三郎の新作舞踊「傾城雪吉原」。

国立劇場の正月は菊五郎劇団中心の公演。小栗判官物の「世界花小栗判官」。小栗判官と

天下を狙う悪人風間八郎が主軸。判官物定番の馬の曲乗りなどを織り込んだ楽しい作品。菊五郎の八郎、時蔵の細川政元と後家お槙、松緑の浪七、菊之助の判官。

三月は鴈治郎が「本蔵下屋敷」、菊之助が「髪結新三」という「家の芸」にそれぞれ初役で挑戦。片岡亀蔵が本蔵と家主、梅枝が三千歳姫と忠七で力量を発揮。

六月は歌舞伎鑑賞教室で、又五郎、歌昇の「連獅子」。七月は同じく鑑賞教室で、「日本振袖始」。時蔵が岩長姫、錦之助が素戔嗚尊、新悟が稲田姫。

十月は「平家女護島」の通しで、「六波羅清盛館」「敷名の浦磯辺」「同御座船」。芝翫が清盛と俊寛という対照的な二役を演じ分けた。孝太郎の東屋、新悟の千鳥。橋之助、福之助ら若手も活躍。

十一月は「名高大岡越前裁」。天一坊事件が題材の河竹黙阿弥作「扇音々大岡政談」の書き換え。梅玉の大岡越前、右團次の天一坊、弥十郎の伊賀亮。「無常門」「水戸屋敷」は四十六年ぶりの復活。

十二月は「増補双級巴」。石川五右衛門物の先行作から人気場面を選んで再構成した三世瀬川如皐作品。序幕の「壬生村」は七十年ぶり、三幕の「木屋町」は九十年ぶり、大詰の「五右衛門隠家」は五十年ぶりの復活。吉右衛門が五右衛門で葛籠抜けを披露し、情感豊かに親子の別れを見せた。歌六、雀右衛門、菊之助の共演。

新橋演舞場は正月が海老蔵、獅童らの公演。Aプロが「天竺徳兵衛韓噺」。獅童が早替わりなどの変化をつけ、徳兵衛を生き生きと見せた。松岡亮作「鎌倉八幡宮静の法楽舞」は「新歌舞伎十八番」の復活物で海老蔵が静御前など七役を勤める五曲掛け合いの舞踊劇。ほかに「口上」。Bプロは「日本むかし話」で宮沢章夫脚本、宮本亜門演出。「竜宮物語」「かぐや姫」などが題材。

八月は岸本斉史の同名漫画を歌舞伎化した「NARUTO―ナルト―」の通し。G2脚本・演出。巳之助がうずまきナルト、ライバルのうちはサスケを隼人が演じ、悪の元締めのうちはマダラを猿之助と愛之助が交互に勤めた。

十一月は十八世勘三郎の追善興行が浅草寺境内の平成中村座でも催された。勘九郎、七之助に加え、扇雀、芝翫が出演。勘九郎は昼に「実盛物語」の実盛で、次男の長三郎が太郎吉。夜は「舞鶴五條橋」の弁慶で、長男の勘太郎が牛若丸、「忠臣蔵七段目」は芝翫が由良之助、七之助がおかるで平右衛門。七之助は昼に「近江のお兼」を踊り、「狐狸狐狸ばなし」でおきわを扇雀の伊之助、芝翫の重善で勤めた。夜は「七段目」のおかる。ほかに夜は「弥栄芝居賑」。

新春の浅草歌舞伎は錦之助を上置きに松也、歌昇、巳之助、新悟、種之助、米吉、隼人、梅丸が出演。一部は隼人の狐忠信の「鳥居前」、次の「御浜御殿」は松也の綱豊、巳之助の助右衛門、米吉のお喜世。二部は種之助の「操り三番叟」、次が「引窓」で歌昇の南与兵衛、松也の濡髪。最後が「京人形」で、巳之助の左甚五郎、新悟の京人形。

五月がシアターコクーンで「切られの与三」。木ノ下裕一補綴、串田和美演出で、瀬川如皐作品をもとに、落語からも場面を取り込んだ。七之助の与三郎、梅枝のお富、扇雀の観音久次。

大阪松竹座は一月が「玉三郎初春特別舞踊公演」。玉三郎と壱太郎の「秋の色種」、玉三郎の「傾城」、壱太郎の「鷺娘」。

四月がスーパー歌舞伎Ⅱの「ワンピース」。猿之助と尾上右近がルフィとハンコックをダブルキャストで演じた。

七月が白鸚、幸四郎の襲名披露で仁左衛門が参加。幸四郎の襲名演目は昼が「勧進帳」の弁慶。夜は「女殺油地獄」の与兵衛。仁左衛門の富樫、孝太郎の義経、猿之助のお吉。白鸚は昼の「河内山」で河内山。ほかに昼は「廓三番叟」で孝太郎、壱太郎、歌昇。「車引」は又五郎の松王丸、鴈治郎の梅王丸、扇雀の桜丸。「河内山」は歌六の松江侯。夜は「御浜御殿」が仁左衛門の綱豊、中車の助右衛門。「口上」。

十月は二代目齊入、二代目右團次襲名披露で坂田藤十郎、雀右衛門、鴈治郎、海老蔵、猿之助が出演。右團次は昼の「華果西遊記」で孫

悟空、夜の「雙生隅田川」の通しでは猿島惣太後に七郎天狗と奴軍介を演じ、宙乗りを披露。ほかに昼は「め組の喧嘩」が海老蔵の辰五郎、雀右衛門のお仲。新作舞踊の「玉屋清吉」(今井豊茂作)は海老蔵。夜の「雙生隅田川」は猿之助、海老蔵、鴈治郎が共演。

京都南座は耐震補強の改修工事を終え、十一月、十二月と二ヶ月続けて新開場と南座四百年を記念する顔見世興行を行なった。十一月は白鸚、幸四郎、染五郎の襲名披露。染五郎の出演は二月の歌舞伎座以来。夜の「勧進帳」は幸四郎が弁慶、白鸚が富樫、染五郎が義経と三代が顔をそろえた。昼の「連獅子」は幸四郎の親獅子、染五郎の仔獅子。白鸚は昼に「鈴ヶ森」の長兵衛で、権八は愛之助。ほかに昼は左團次の粂寺弾正の「毛抜」、「封印切」は仁左衛門の忠兵衛、孝太郎の梅川。夜は「対面」が孝太郎の十郎、愛之助の五郎、仁左衛門の工藤。「雁のたより」は鴈治郎の三二五郎七、壱太郎の司で、幸四郎が若旦那の金之助に出演。ほかに「口上」。

十二月は昼の序幕が「寺子屋」で芝翫の松王丸、魁春の千代、愛之助の源蔵、扇雀の戸浪。続いて梅玉の半九郎、孝太郎のお染の「鳥辺山心中」、次が「ぢいさんばあさん」で仁左衛門の伊織、時蔵のるん。最後が「新口村」で坂田藤十郎の忠兵衛、扇雀の梅川、仁左衛門の孫右衛門。夜が仁左衛門の権太で「義経千本桜」の「木の実」「小金吾討死」「すし屋」。次が鴈治郎の「面かぶり」、続いて「弁天娘女男白浪」。愛之助の弁天小僧、右團次の南郷、鴈治郎の忠信、孝太郎の赤星、芝翫の駄右衛門。最後が鷹之資の悪玉、千之助の善玉の「三社祭」。

名古屋の御園座は五年間の休館を経て四月に新開場。柿葺落は白鸚、幸四郎の襲名披露。幸四郎は昼に「籠釣瓶」の次郎左衛門、夜に「廓文章」の伊左衛門を、それぞれ初役で演じた。白鸚が立花屋、雀右衛門が八ツ橋、壱太郎が夕霧。夜の「勧進帳」では白鸚が弁慶、幸四郎が富樫、鴈治郎が義経。ほかに昼は序幕が「対面」で、又五郎の五郎、鴈治郎の十郎、左團次の工藤。「口上」。夜が吉右衛門の「石切梶原」。

五月はスーパー歌舞伎Ⅱ「ワンピース」。十月は新開場後初の顔見世。昼の最初が松緑の狐忠信の「鳥居前」。次が「二人椀久」で時蔵の椀屋久兵衛、梅枝の松山太夫。最後が「野晒悟助」で菊五郎の悟助。夜の最初が「女暫」で魁春の巴御前。続いて松緑の親獅子、萬太郎の仔獅子の「連獅子」。最後が「与話情浮名横櫛」で梅玉の与三郎、時蔵のお富。

三月末で五十二年の歴史の幕を閉じた名古屋の中日劇場では「最終公演シリーズ・歌舞伎舞踊特別公演」が催された。三代猿之助(現・猿翁)一門が、スーパー歌舞伎を上演した劇場にふさわしくゆかりの俳優が出演しての公演。右團次の「口上」が最初で、右團次の親獅子、弘太郎の仔獅子の「連獅子」、笑也の「藤娘」。

博多座では三公演があった。二月が花形歌舞伎で、扇雀、門之助を上置きに勘九郎、七之助、松也が出演。昼の最初が「磯異人館」で橋之助、松也、児太郎。次が七之助の「お染の七役」で勘九郎の鬼門の喜兵衛。夜が「義経千本桜 渡海屋・大物浦」で松也の知盛、扇雀の典侍の局。最後が「鰯売恋曳網」で勘九郎の猿源氏、七之助の傾城蛍火実は丹鶴城の姫。

六月が白鸚、幸四郎の襲名披露。仁左衛門、梅玉、魁春が参加。幸四郎が昼は「伊達の十役」の通しで十役を勤め、夜は「鏡獅子」で小姓弥生後に獅子の精。白鸚は「伊達の十役」で三浦屋亭主、夜は「魚屋宗五郎」の宗五郎。ほかに夜は仁左衛門の「俊寛」、「口上」。

十一月は新作歌舞伎「あらしのよるに」。南座で初演し、歌舞伎座で再演され、三度目の公演。獅童の狼がぶ、松也の山羊のめいの友情物語。

四月の香川県・金丸座の「四国こんぴら歌舞伎大芝居」は芝翫、橋之助、福之助の襲名披露で梅玉、魁春、松也が参加。一部の最初が「江島生島」で松也の生島、児太郎の江島。中幕が「鞘当」で梅玉の名古屋山三、橋之助の不破。最後が芝翫の「魚屋宗五郎」。二部は最初が橋之助の狐忠信の「鳥居前」、次が「鎌倉三代記」で芝翫の高綱、魁春の時姫、梅玉の三浦之助。最後が「石橋」で松也、橋之助、福之助。

2018年の商業演劇

水落　潔

徳島・大塚国際美術館の二月のシスティーナ歌舞伎は「GOEMON　ロマネスク」。愛之助、壱太郎、種之助、吉弥。

十月の兵庫・出石の出石永楽館での「永楽館歌舞伎」は愛之助の弁慶の「弁慶上使」「口上」と舞踊劇「神の鳥」。

熊本・八千代座では十月末から十一月に玉三郎の舞踊と過去の映像を組み合わせた「映像×舞踊公演」で「鏡獅子」「藤娘」が披露された。

公文協主催公演は、中央コースが芝翫、橋之助、福之助の襲名披露で梅玉、秀太郎が参加。芝翫の長兵衛の「文七元結」、橋之助、福之助の「棒しばり」、「口上」。東コースは菊之助、彦三郎、團蔵。梅枝の「近江のお兼」、菊之助の五郎蔵、彦三郎の土右衛門の「御所五郎蔵」、菊之助の次郎冠者、萬太郎の高足売の「高坏」。西コースは愛之助、門之助、壱太郎。「義経千本桜」の「吉野山」「川連法眼館」で愛之助の狐忠信と佐藤忠信、壱太郎の静御前、門之助の義経。

三月から四月には勘九郎、七之助と中村屋一門の巡業「春暁特別公演」があり、「鶴亀」「浦島」「枕獅子」を上演。

四月は獅童とバーチャルシンガーの初音ミクが共演の「超歌舞伎」の第三弾「積思花顔競」を幕張メッセで公演。

海老蔵は三、四月に『源氏物語』～朧月夜より須磨・明石まで～」、九、十一月は「古典への誘い」で歌舞伎十八番の復活「蛇柳」を各地で上演した。

八月には国立劇場の研修修了者を中心にした「稚魚の会・歌舞伎会合同公演」「音の会」があった。

自主公演も多く、三月は芝のぶと笑野の「梅笑会」が国立小劇場で催された。笑野の「男舞」、芝のぶの「藤娘」、芝のぶのお三輪、笑野の橘姫、猿之助の求女の「道行恋苧環」。

八月には歌昇、種之助兄弟の「第四回双蝶会」が国立小劇場であり、「川連法眼館」を種之助の忠信、忠信実は源九郎狐、「関の扉」を歌昇の関兵衛、種之助の宗貞、児太郎の小町姫、傾城墨染実は小町桜の精で上演。

同月に同劇場で、尾上右近も勉強会「第四回研の会」を開催。「封印切」を右近の忠兵衛、壱太郎の梅川、「二人椀久」を右近の椀屋久兵衛、壱太郎の松山太夫で上演。

九月は鷹之資が勉強会の「第五回翔之會」で、仕舞「熊坂」と清元舞踊「吉野山」の忠信を勤めた。

一年を象徴する漢字に「災」が選ばれた。天災、人災が相次いだ年だった。六月に大阪北部を震源とする地震、七月に西日本豪雨、九月には台風で関西国際空港が浸水、北海道東部地震があり大きな被害が出た。夏は異常な猛暑が続いた。人災では財務省の文書改ざん、性暴力、セクハラ被害の告発が相次ぎ、スポーツ界や医学部入試で不祥事が続発した。世界では六月に米朝首脳会談が行われたが、北朝鮮非核化は停滞したままで、年後半には米中の貿易摩擦が世界経済に大きな影響を与え株価は下落した。カリスマ経営者として知られた日産自動車のゴーン会長が東京地検に逮捕され衝撃を与えた。商業演劇はおおむね景気が良い状態が続いたため比較的順調に推移した。

新橋演舞場は多彩なプログラムを組んだ。一月は昨年に続いて海老蔵一座の歌舞伎公演、二月は「喜劇名作劇場」と銘打って北條秀司作「女剣劇朝霧一座」を改題して斎藤雅文が演出した「有頂天一座」を上演した。昨年、渡

辺えり、キムラ緑子のコンビで演じた「有頂天旅館」に次ぐ有頂天シリーズの第二弾で、十二月にも第三弾を上演し、劇場の人気シリーズにしたいようだ。元の戯曲は作者が新派に書いた作品で、昭和三十年代の女剣劇一座の座長の座を巡る女の争いを描いた喜劇である。二代目座長が渡辺、その座を狙う野心家の花形がキムラで、老練な興行主が村田雄浩、元座員で映画入りしてスターになった男が段田安則。新派勢が脇に出て水準をいく舞台に仕上がった。三月はパルコプロダクション制作の三谷幸喜作、演出の新作「江戸は燃えているか」で、幕末の江戸を舞台にした喜劇。歴史上名高い西郷と勝の会談をパロディにした喜劇で、獅童の勝を気弱な女好きの男にし、嘘や誤解やすれ違いという作者独特の手法を駆使して描いた娯楽作品。松岡昌宏、高田聖子、藤本隆弘ら共演者も揃い笑いに溢れた舞台になった。四、五月は「滝沢歌舞伎」で、五月の後半に築山桂原作、松田健次脚本、錦織一清演出「蘭」を上演した。若き日の緒方洪庵を主人公にした時代推理劇で藤山扇治郎が主演し、北翔海莉、石倉三郎、久本雅美らが共演した。六月はこれもシリーズになった「熱海五郎一座」の五作目。座長の三宅裕司作、演出、主演の「船上のカナリアは陽気な不協和音」で、豪華客船を舞台にした推理劇仕立てのコメディ。小林幸子がゲスト出演し、渡辺正行、小倉久寛、ラサール石井ら一座のメンバーが共演した。七月は前半がOSKの「レビュー夏のおどり」。後半は松竹新喜劇。劇団結成70周年記念公演で財産演目の「人生双六」と「峠の茶屋は大騒ぎ」と「口上」を上演した。渋谷天外、高田次郎、小島慶四郎、井上惠美子、藤山扇治郎ら劇団員のほか久本雅美、大津嶺子らが出演し関西喜劇の面白さを示した。八月は漫画を原作にした新作歌舞伎「NARUTO」。九月は芝翫が主演したシェイクスピア作、河合祥一郎訳の「オセロー」で、永年蜷川幸雄のもとで助手を務めてきた井上尊晶が演出し、蜷川演出の特色だったビジュアルでダイナミックな舞台を造形した。神山智洋、檀れいが共演した。十月は人気コミックを舞台化した「るろうに剣心」。小池修一郎脚本、演出で宝塚歌劇で上演しヒットした作品で、その時主演した早霧せいなを起用して、周りは男優で演じた舞台。梅田芸術劇場が企画制作し松岡充、上白石萌歌らが共演した。十一月は新派百三十年を記念した公演で、横溝正史原作の「犬神家の一族」を齋藤雅文が脚色、演出した。昭和二十年の信州の財閥一家の遺産相続を巡る血肉の争いを描いた探偵小説で、喜多村緑郎が金田一耕助を演じ、水谷八重子、波乃久里子、河合雪之丞、田口守ら新派勢に佐藤B作、浜中文一らが加わった。何度も舞台化されてきた作品だが、一杯道具を使ってスピーディに物語を展開していく演出と、戦争の傷跡を描いた原作の時代性を活かした脚本の上手さが光り優れた舞台になった。十二月は二月と同じ出演者による小幡欣治作「隣人戦争」をマギーが演出した「有頂天団地」で、昭和五十年代に続々と生まれた新興住宅の住人と、元から住んでいる住人とのトラブルを描いた喜劇。主演の二人のほか、笹野高史、鷲尾真知子、広岡由里子らが出演した。

　このほか新派は正月に三越劇場で山田洋次原作、脚本、演出で「家族はつらいよ」を上演した。16年に公開した同名の映画の舞台化で、誕生日プレゼントに離婚届を望む老妻を水谷八重子、妻の反乱に大慌てする夫を田口守、一家の長男を喜多村緑郎、居酒屋の女将を波乃久里子が演じた。時代と共に変化した家族のあり方を描いた喜劇で、新派にとっては初の平成の物語で、好舞台に仕上がった。さらに三月末には短期間ながらサンシャイン劇場で江戸川乱歩作、齋藤雅文脚色、演出の「怪人二十面相」を喜多村緑郎、河合雪之丞、貴城けいらで上演した。夏から秋にかけて昨年三越劇場で演じた有吉佐和子原作「華岡青洲の妻」を各地で巡演した。喜多村緑郎の青洲、水谷八重子の於継、河合雪之丞の加恵、波乃久里子の小陸という配役であった。

　松竹は九月にはジャニーズ事務所と提携して日生劇場で「少年たち」を上演した。

　東宝は帝劇が今年もミュージカル路線を貫いた。作品名だけを列記すると、一月は「ジャ

ニーズ・ハッピーニューイヤー・アイランド」、二、三月が「エンドレス・ショック」。四月から五月の初めにかけては「1789」、五月末から六月末までが「モーツァルト」、七月後半から八月が「ナイツ・テイル」、九月が「ドリーム・ボーイズ」、十月から十一月半ばまでが「マリー・アントワネット」、十二月が「ジャニーズ・アイランド」であった。

シアタークリエもミュージカルが多かった。一月は「ミュージカル・コンサート」、二月は「ファンホーム」、三月は「マディソン郡の橋」とミュージカルが並んだ。四月は倉持裕作、演出の「火星の二人」。七人乗りのジェットコースターが事故を起こし二人だけが奇跡的に生き残った。その一人は廃人のようになり、もう一人は逆に活力に満ちている。再会した二人の会話から不思議な因縁が見えて来るというファンタジーで、竹中直人と生瀬勝久が主演し上白石萌音、高橋ひとみらが共演したが、平凡な出来栄えに終わった。この後全国各地を巡演した。五月は「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」、六月は「シークレット・ガーデン」、七月は「大人のけんかが終わるまで」、八月は「ゴースト」、九月は「ジャージー・ボーイズ」と四月以外はミュージカルを並べた。

十月は一年半ぶりに病気回復した藤山直美主演の小野田勇作、田村孝裕潤色、演出の「おもろい女」。森光子の当たり役で直美は15年に継承して初演して評判を取った。昭和初期に大活躍した天才漫才師ミス・ワカナの人生を綴った物語で、十五歳で相方の一郎と出会い結婚、別離、戦争と公私の試練を経ながら芸能界の頂点を極め急逝するまでを綴っている。藤山直美が抜群の上手さでワカナの多面性を描き出し、18年の商業演劇ナンバーワンの舞台になった。一郎には初演と同じく渡辺いっけいが演じ、天宮良、山本陽子、田山涼成らが共演した。十一月は「ピアフ」の再演、十二月は「オン・ユア・フイート」と再びミュージカルになった。このほかクリエで上演を重ねてきた中島淳彦作、鈴木裕美演出「宝塚BOyS」を八月に東京芸術劇場で新キャストで上演した。

東宝系の梅田芸術劇場は一月日生劇場、二月梅田芸術劇場で、江戸川乱歩原作、三島由紀夫脚本、デビッド・ルボー演出の「黒蜥蜴」を上演した。黒蜥蜴を中谷美紀、明智小五郎を井上芳雄が演じ、成河、たかお鷹、朝海ひかるらが出演したが平凡な出来に終わった。

明治座は歌手公演とバラエティが中心の路線になった。一月は「コロッケ特別公演」で、二、三月は「五木ひろし特別公演」。四月は「水森かおり」、「島津亜矢」らの短期公演。五月は有吉佐和子原作、堀越真脚本、西川信廣演出「仮縫」を上演した。檀れいが洋裁学校の生徒から次第にファッション界をのし上がっていく野心家のデザイナーを演じ高橋惠子、古谷一行、山本陽子らが共演した。舞台は一通りの出来に終わった。劇場制作のストレートプレイはこの一作だけであった。六月は貸し劇場で四月に新歌舞伎座で上演した「花盛り四人姉妹」の引っ越し公演。七月は「川中美幸」。八月は前半が「山内惠介」、後半が「忘村けん一座」。九月は「梅沢富美男劇団」で研ナオコが加入した。十月は「氷川きよし」特別公演。十一月は貸し劇場で日本テレビ創立65周年記念公演の山田風太郎原作、マキノノゾミ脚本、堤幸彦演出の「魔界転生」。天草の乱で亡くなった天草四郎が魔界から蘇り、剣士たちを次々に魔界に連れていくという時代怪異劇で、溝端淳平が天草四郎、上川隆也が柳生十兵衛、松平健が柳生宗矩を演じ、浅野ゆう子、高岡早紀らが共演した。十二月は年末に「師走明治座時代劇祭」を上演した。明治座が得意にしてきた大衆的な人情劇が姿を消し、貸し劇場が増えてきている。一方で長期公演の出来る歌手は五木ひろし、氷川きよしだけで、一か月公演の出来るスターや演目が乏しくなり単独劇場の難しさが見えた。

三越劇場は新派のほかに、年の前半に「はーとふるはんど」、「春秋会男組」、「二宮さよ子ひとり芝居」などの短期公演、十一月にはロマンチック・コメディ「さよなら、チャーリー」、声優たちを中心にした「パパ、アイ・ラブ・ユー」などを上演した。十二月には民藝が「グレイクリスマス」を上演した。

博品館劇場は三月に「銀座でショー」と題した芝居とショーの公演、八月に鵜山仁演出、賀来千香子主演の「しあわせの雨傘」を上演した。

プロダクション企画公演としてはシス・カンパニーが一月に新国立劇場で秋元松代作「近松心中物語」をいのうえひでのりの新演出、堤真一、宮沢りえ、池田成志、小池栄子らで上演した。水準に達した舞台であった。ホリプロは五月に日生劇場でエドモン・ロスタン作、マキノノゾミ上演台本・演出「シラノ」を吉田鋼太郎のシラノ、黒木瞳のロクサーヌで上演した。吉田が好演した。十月にはフジテレビが新国立劇場でトム・シュルマン脚本、上田一豪台本、演出で「いまを生きる」を佐藤隆太、宮近海斗、永田崇人、大和田伸也らで上演した。パルコは十一月に三島由紀夫の二つの作品を舞台化して上演した。一つは絶筆となった「豊饒の海」を長田育恵が脚本、イギリスのマックス・ウエブスターが演出、サザンシアターで上演した舞台で、東出昌大、宮沢水魚、上杉柊平、大鶴佐助らが出演した。二つ目はサンシャイン劇場でノゾエ征爾の脚本、演出で上演した「命売ります」。ある日、ふと「死のう」と思い立った青年が「命売ります」という新聞広告を出したことから始まるサスペンス劇で、東啓介が主演し上村海成、不破万作、温水洋一ら個性派が共演した。

前進座は大劇場の長期公演として一月に京都先斗町歌舞練場で「初姿先斗賑」、「棒しばり」、「唐茄子屋」を藤川矢之輔、河原崎國太郎らで上演、五月に一座総出演で国立劇場で河竹黙阿弥作「人間万事金世中」、十月に大阪文楽劇場で昨年国立劇場で演じた山田洋次監修、脚本、小野文隆演出の「裏長屋騒動記」を上演した。そのほか「柳橋物語」、「くずーい屑屋でござい」、「薄桜記」「ちひろ」などを全国各地で上演した。

昨年TBSテレビが東京の豊洲に建設した360度シアター「IHIステージアラウンド東京」では宮藤宮九郎作、いのうえひでのり演出「メタルマクベス」を三チームの出演で七月から年末までロングランをした。2006年に作者が劇団☆新感線に書いた戯曲のリメイクで、シェイクスピアの「マクベス」を近未来の物語に置き換え、それに1980年代のロックバンドの世界を二重写しにしたロック・ミュージカルで、順に橋本さとし、尾上松也、浦井健治、濱田めぐみ、大原櫻子、長澤まさみがマクベス夫婦を演じ、多くの人気タレントが共演した。

名古屋地区は中日劇場が三月末で閉館した。一月は「石川さゆり」、二月は「宝塚歌劇星組」で、二月末から歌舞伎、文楽をはじめ劇場に所縁のあった歌手や俳優が出演する「さよなら公演」を行った。代わって四月に御園座が新築開場した。旧劇場の跡地に新築された御園座は、積水ハウスが開発した地下1階地上41階の「御園座タワー」の2-4階に建設された。劇場部分は隈研吾の設計で伝統の継承と発展をコンセプトにし「なまこ壁」「御園座レッド」と名付けられた朱の色彩、「市松模様」や「亀甲模様」を使った内装などに特色がある。33億円を超す建設資金は県、市、財界から集めた。柿落しは高麗屋三代襲名の歌舞伎で、五月はスーパー歌舞伎II「ワンピース」、六月は「滝沢歌舞伎」、七月は「舟木一夫」、八月は「モーツァルト」、九月は「名古屋をどり」と「三山ひろし」、十月は「顔見世」、十一月は「コロッケ」と「吉本新喜劇」、十二月は「マリー・アントワネット」を上演した。中日劇場と同様に様々なプログラムを並べた公演をしていくことになっている。

大阪の松竹座は一月が歌舞伎で玉三郎の「舞踊公演」、二月は前半が坂井希久子原作、わかぎゑふ脚本、演出の「泣いたらアカンで通天閣」で、ぐうたら親父としっかり者の娘の人情劇。赤井英和と三倉茉奈が出演した、後半は新橋演舞場から引っ越した「有頂天一座」、三月は関ジャニの「スペシャルショー」、四月は「ワンピース」五月は前半が「OSK春のおどり」、後半は新橋演舞場から引っ越した「蘭」、六月は昨年日生劇場で上演した山田洋次脚本、演出の音楽劇「マリウス」、七月は高麗屋三代襲名の「歌舞伎」。八月は日生劇場から引っ越した「少年たち」。九月は創立70周年記念の「松竹新喜劇」で「人生双六」、「ご挨拶」、「八人の幽霊」を上演した。十月は右

團次、齊入襲名の「歌舞伎」、十一月は新橋演舞場からの引っ越し公演「るろうに剣心」、十二月は恒例の「関ジャニ」のショー。

梅田芸術劇場は劇場制作や東宝制作のミュージカル、宝塚歌劇団の公演を上演した。

新歌舞伎座は歌手公演を中心にした路線を貫いた。一月が「神野美伽」、二月は「山内惠介」、三月は「川中美幸」、四月は堀越真作、水谷幹夫演出「花盛り四人姉妹」で、吉野の老舗旅館を巡る騒動を描いた作品。藤あや子、石野真子、藤原紀香、三倉茉奈が出演した。五月は「梅沢富美男　香西かおり」、六月はミュージカル「1789」、七月は「三山ひろし」、八月は「コロッケ」、九月は複数の歌手の短期公演、十月は「福田こうへい」、十月は「前川清　中村美律子」「コロッケ」、十一月は「坂本冬美」で泉ピン子が友情出演、十二月は歌手やタレントの短期公演だった。

京都の南座は「改正耐震改修促進法」に基づく耐震工事が完了し十一月の高麗屋三代襲名の「顔見世」から二年六か月ぶりに新装開場した。十二月も「顔見世」。

博多座は一月が「坂本冬美コンサート」とミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」、二月が「花形歌舞伎」、三月がミュージカル「舞妓はレディ」と「ブロードウエイと銃弾」、四月は海老蔵主演の「源氏物語」と「石川さゆりコンサート」、五月は「宝塚花組」、六月が高麗屋三代襲名の「歌舞伎」、七月がミュージカル「1789」、八月が「北島三郎オン・ステージ」、九月がミュージカル「マリー・アントワネット」、十月が「魔界転生」、十一月が花形歌舞伎「あらしのよるに」、十二月は例年通り市民に開放した。

今年も多くの演劇関係者が亡くなった。俳優では大杉漣（2月21日　66歳）、左とん平（2月24日　80歳）、順みつき（4月17日　70歳）、朝丘雪路（4月27日　82歳）、加藤剛（6月18日　80歳）、鈴木智（7月10日　84歳）、常田富士男（7月18日　81歳）、星由里子（7月16日　74歳）、津川雅彦（8月4日）、菅井きん（8月14日　92歳）、樹木希林（9月15日　75歳）、穂積隆信（10月19日　87歳）、角替和枝（10月27日　64歳）、江波杏子（10月27日　76歳）、赤木春恵（11月29日　94歳）、四季の創立者で演出家の浅利慶太（7月13日　85歳）、劇作、演出家の村井志摩子（5月9日　89歳）、文楽の竹本住太夫（4月28日　93歳）、鶴澤寛治（9月5日　89歳）、評論家の小藤田千榮子（9月11日　79歳）、藤田洋（9月28日　84歳）

ご冥福を祈りたい。

二〇一八年の現代演劇

林　尚之

劇団四季を日本最大の劇団に育て上げた演出家浅利慶太氏が85歳で亡くなった。戦後の53年に劇団四季を創立し、アヌイ、ジロドゥなどフランス演劇を中心に活動を始めた。芸術本来が持つ「人生の感動」を観客に伝える演劇を標榜し、母音法など「四季メソッド」と言われる発声法で明晰な台詞術が際立った。若手だった寺山修司、石原慎太郎らを起用したり、「エクウス」など海外の現代戯曲も積極的に上演した。その言動から毀誉褒貶のある人でもあったが、晩年は劇団四季を去り、浅利演出事務所を立ち上げ、1人の演劇青年に戻り、「オンディーヌ」「アンドロマック」などを上演した。そして、戦争体験者だった浅利氏は「あの戦争の悲劇を語り継ぐ責任がある」と、ミュージカルの戦争三部作の上演を重ねた。80歳で亡くなった俳優座の加藤剛さんも小学生で終戦を迎えたが、軍医だった義兄が戦死していた。強制収容所で虐殺されたユダヤ人医師を主人公にした朗読劇「コルチャック」に主演するなど、反戦の姿勢は一貫して

いた。そんな2人に共通しているのは、2度と戦争はしてはならないという強い思い。戦争体験者として反戦を発信する演劇人がまたいなくなった。

新国立劇場は宮田慶子芸術監督の最後のシーズンとなり、ジョージ・オーウェル原作で監視社会の恐ろしさを描いたアイク&マクミランの共作「1984」(主演井上芳雄)を次期芸術監督の小川絵梨子が演出した。宮田は、シェークスピア作、鵜山仁演出「ヘンリー五世」(浦井健治)、自ら演出した蓬莱竜太作「消えていくなら朝」(鈴木浩介)を最後に2期8年の任期を終えた。秋からは40歳の小川が新しく芸術監督に就任した。19〜20年シーズン開幕の第1弾はカミュ作「誤解」(原田美枝子、小島聖)で、演出は32歳の若手の稲葉賀恵。2作目はハロルド・ピンター作「誰もいない海」(柄本明)で、演出は中堅の寺十吾。3作目は英国の格差社会の埋められない溝を鮮明にしたデヴィッド・ヘア作「スカイライト」(蒼井優)で、小川自らが演出した。まずは中堅・若手の演出家を起用し、19年以降も若手演出家の起用が決まっている。停滞傾向だった新国立劇場に新しい風を吹かせようという意図は明確で、今後の手腕に期待が集まっている。

今や、演劇界のトップ演出家となった栗山民也の活躍ぶりが顕著だった。アヌイ作「アンチゴーヌ」(蒼井優)は国家を背負う叔父とアンチーヌとの対決が鮮烈だった。蒼井はこの作品と「スカイライト」の演技で紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞した。カークウッド作「チルドレン」(高畑淳子、若村麻由美)は地震でメルトダウン(炉心溶融)した原発を巡り、揺れ動く科学者の姿を描いた。東日本大震災に触発されて執筆した作品だが、これが日本ではなく、英国で生まれたことに驚きがある。再演の井上ひさし作「夢の裂け目」(段田安則)は、東京裁判で証言した紙芝居屋の親方を通して、庶民の戦争責任を問いかけている。

栗山と同年代の鵜山仁は、ジャン・ジュネ作「女中たち」(中島朋子、那須佐代子)を演出したほか、戦時中の米国で強制収容された日系人の姿を描いた井上ひさし作「マンザナ、わが町」(土居裕子)、人生の終わりを迎えた老夫婦の交流が愛おしいアーネスト・トンプソン作「黄昏」(八千草薫)と、多彩な作品を手掛けた。

中堅の演劇集団円の森新太郎は、観客に有罪か無罪かの判断を迫るシーラッハ作「TERROR テロ」(橋爪功)、戦争によって翻弄される若者の姿を描いたアイルランドのオケイシー作「The Silver Tassie 銀杯」(中山優馬)と、確かな仕事を残した。

文学座を退団し、フリーとなった上村聡史は、「炎 アンサンディ」の作者ワジディ・ムワワドの約束の血4部作の1作目「岸 リトラル」(岡本健一)を演出。死んだ父の埋葬場所を探し旅する中で、封印された父母の過去が明かされる。続いて取り組んだヤスミナ・レザ作「大人のけんかが終わるまで」(鈴木京香)は、不倫関係の男女が舌戦を展開する辛口コメディ。

長塚圭史はアーサー・ミラー作「セールスマンの死」を鮮やかに今の時代によみがえらせた。風間杜夫は、歴代の滝沢修、仲代達矢らとは異なる、社会に翻弄された迷えるウィリー・ローマンを造形した。

若手藤田俊太郎は大リーグを舞台に人種差別、LGBT問題に切り込んだグリーンバーグ作「Take Me Out2018」を再演。故青井陽治さんから引き継いだ朗読劇「ラヴ・レターズ」を新演出で再スタートした。

野田秀樹は、30年前に初演された作・演出舞台「贋作・桜の森の満開の下」を妻夫木聡、深津絵里、天海祐希、古田新太で再演。古代の国造りに託した、美しくも残酷な寓話劇で、パリ公演も好評だった。

台頭著しい若手作家の作品が数多く上演された。1970年代から80年代初めに生まれ、就職氷河期を経験した「ロスト・ジェネレーション世代」にあたるが、今や彼らが演劇界の最前線を担っている。

てがみ座の長田育恵は、同座「海越えの花たち」(木野花演出)で戦後も朝鮮半島に残らざるをえなかった女性たちの姿を描き、三島

由紀夫の長編小説を舞台化した「豊饒の海」（東出昌大）の脚本、青年座に書き下ろした、母娘の愛憎が切ない「砂塵のニケ」の３作で、紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞した。

劇団チョコレートケーキの古川健の「ドキュメンタリー」「遺産」は意欲作。「ドキュメンタリー」は薬害エイズ、「遺産」は戦時下の満州で細菌兵器開発を推進した７３１部隊で人体実験を行った医学者たちの実相に迫った。コンビを組む日澤雄介の演出もきめ細かだった。文学座に、戦後の１人の男の平凡な生き様を追った「かのような私　或いは斎藤平の一生」を書き下ろした。

モダンスイマーズの蓬莱竜太は、作・演出した句読点三部作「嗚呼いま、だから愛。」「悲しみよ、消えないでくれ」「死ンデ、イル。」を連続上演した。

ミナモザの瀬戸山美咲は流山児事務所「わたし、と戦争」で男女問わずに従軍する近未来を舞台に、戦争のリアルさを浮き彫りにし、青年座「残り火」はあおり運転による事故を巡り、被害者だけでなく、加害者家族の物語を紡いだ。

パラドックス定数の野木萌葱はシアター風姿花伝で新旧５作を連続上演した。人体実験を行った７３１部隊の「７３１」をはじめ、拳銃を作るどん詰まり兄弟の「ブロウクン・コンソート」、羽田沖の日航機墜落を題材にした「５ｓｅｃｏｎｄｓ」、チェスを通して囚人と看守の交流を描く「Ｎｆ３Ｎｆ６」などを上演したほか、下川事件に迫る「Ｄ５１－６５１」を和田憲明演出で再演した。

最も注目されたのは大阪を拠点とするｉａｋｕの横山拓也。小松台東の松本哲也演出で「目頭を押さえた」を再演し、「粛々と運針」「梨の礫の梨」など４作を連続上演、俳優座に「首のないカマキリ」を書き下ろし、子供時代のケガが原因で家族が崩壊する「逢いにいくのに、雨だけど」と、東京に爪痕を残した。

イキウメの前川知大は、意識の中の魔物である感情、衝動についての短篇オムニバス「図書館的人生Ｖｏｌ．４　襲ってくるもの」を上演した。

トラッシュマスターズの中津留章仁は、高知県の過疎の村を舞台にした「埋没」のほか、出世作「奇行遊戯」を再演。青年劇場に「分岐点」を書き下ろした。

谷賢一は原発の誘致から事故に至るまでの原発三部作の第１弾「１９６１年：夜に昇る太陽」を上演し、「光より前に～夜明けの走者たち～」は円谷幸吉、君原健二と対照的なマラソン選手を描いた。

温泉ドラゴンのシライケイタは、実際の事件を題材にジャーナリズムの在り方を問う「ＴＨＥ　ＤＡＲＫ　ＣＩＴＹ」を作・演出し、戦争に熱狂する社会と向き合う新聞社の苦悩を描いた原田ゆう作「嗚呼、萬朝報！」を演出した。

詩森ろばは風琴工房を解散し、ユニット「シリアルナンバー」の旗揚げ公演として、将棋指しの少年を主人公にした「ｎｅｘｔ　ｍｏｖｅ」、解離性人格障害の青年と担当医の会話を通して、精神科医の死に迫る「ｎｕｓｅｒｙ」、失踪したロボット開発者の兄と行方を追う弟の会話劇「ＲＯＢＯＴＡ」を連続上演。年末上演の「アトムが来た日」は原発をめぐって過去と近未来が交錯する作品。

ＪＡＣＲＯＷの中村ノブアキは、働き方改革で混乱する職場を舞台にした「焔～ほむら」、田中角栄を主人公にした「闇の将軍」シリーズの「夕闇、山を越える」を再演し、首相となるまでの「宵闇、街に登る」を初演した。

ハイバイの岩井秀人は劇団創立15周年を記念し「夫婦」「て」を同時上演した。

別役実の１４４作目となる「ああ、それなのに、それなのに」は弛緩した殺人行為をテーマに、右往左往する男たちがおかしい。永井愛は政治とマスコミの危うい関係に迫る「ザ・空気　ｖｅｒ．２　誰も書いてはならぬ」（安田成美）、鄭義信は戦犯となった在日朝鮮人の悲劇を描く「赤道の下のマクベス」（池内博之）、平田オリザは高橋源一郎の同名小説を元にした「日本文学盛衰史」で通夜の場に数多くの作家たちを登場させ、日本近代の歩みを投影しつつ、軽やかな舞台を作った。平田は、同作で鶴屋南北戯曲賞を受賞。

松尾スズキは、主宰する劇団大人計画が創

立30周年を迎え、年末にイベント「大感謝祭」を行い、「ニンゲンご破算」(阿部サダヲ)に手を加えて15年ぶりに再演した。

ナイロン100℃のケラリーノ・サンドロヴィッチは、壮大な家族の歴史劇「百年の秘密」を再演し、「修道女たち」(鈴木杏)で、善意の行為が忖度によって悪意に変換する怖さを描き出した。一方で、「睾丸」は、ナンセンス喜劇の衣をまといつつ、平成の拝金主義の闇を鋭く突いた。

日本劇作家協会の第6代会長に就任した渡辺えりは、主宰するオフィス3○○の40周年記念公演で、芥川賞受賞の作家上田岳弘とコラボした新作「肉の海」を上演した。

新劇系劇団は、全国の演劇鑑賞団体の会員が減ったり、学校公演の減少など、厳しい環境の中で模索を続けている。

制作陣が若返り、新体制となった俳優座の第1弾は山谷典子作、深作健太演出「いつもいつも君を憶う」。100年の時を見つめた時計を通し、人々の営みを切なく描いた。横山拓也を起用した眞鍋卓嗣演出「首のないカマキリ」は命を考えさせる会話劇で、鈴木聡作、佐藤徹也演出「われらの星の時間」ではベテランの俳優が活躍した。

文学座はゼレール作、西川信廣演出のラブコメディー「真実」(渡辺徹)で幕を開け、人間の痛みに踏み込むローアー作「最後の炎」に演出2作目の生田みゆきが挑んだ。財産演目の継承では、三遊亭円朝の落語を原作に大西信行脚本、鵜山演出「怪談　牡丹燈籠」は新キャストとなり、杉村春子の代表作だった森本薫作「女の一生」は布引けい役が山本郁子に引き継がれ、戌井市郎演出を下敷きにした鵜山の新演出で上演。ニコルズ作「ジョー・エッグ」を若手の西本由香が演出するなど、世代交代が進んでいる。

民藝も、東京裁判、BC級戦犯裁判の不条理を描いた木下順二作「神と人とのあいだ」二部作を一挙上演し、老舗劇団の気概をみせた。第一部「審判」は兒玉庸索、BC級戦犯第二部「夏・南方のローマンス」は丹野郁弓が演出し、出演陣も若返った。漂流郵便局に手紙を託す男女が主人公の佐藤五月作「ペーパームーン」(樫山文枝)を中島裕一郎、戦時下の満州で国を超えて協力し合った映画人を描く黒川陽子作「時を接ぐ」(日色ともゑ)を丹野が演出した。敗戦後の伯爵家を舞台にした斎藤憐の名作「グレイクリスマス」も、丹野演出で10年ぶりに再演した。

ビル改築のため、青年座劇場を閉じた青年座は意欲的な舞台が続いた。長田作、宮田慶子演出「砂塵のニケ」が青年座劇場最後の公演となり、その後は下北沢の小劇場に場所を移した。安楽死問題を描いた帚木蓬生の小説を元にした「安楽病棟」をシライケイタ脚本、磯村純演出で上演。福島で活動する高木達の新作で、原発事故で避難地区に取り残された夫婦の1週間の物語「ぼたん雪が舞うとき」は演出を伊藤大、黒岩亮、斎藤理恵子の3人が担当。出演者もラストも3様の競作となった。

演劇集団円は、シェークスピア作、渡辺さつき演出「十二夜」は若手が出演。内藤裕子作・演出「藍ノ色、沁ミル指ニ」は、家族の絆を鮮明にみせた秀作。金田明夫、野村晃史ら充実した布陣で、野村はこの演技で紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞した。

文化座は戦時中の簡易旅館を舞台に困難な時代を生きた人たちを描いた「夢たち」、戦時下の工場を舞台にした「反応工程」と、三好十郎作品をいずれも松本裕子が演出。原田マハの小説を原作に、戦後の沖縄で独自の画家活動を行う若者と米軍軍医が心を通わせる杉浦久幸脚本、田村孝裕演出「太陽の棘」を上演。3作の上演成果で、紀伊国屋演劇賞団体賞を受賞した。

青年劇場は戦争で夢を絶たれた青年を描く大西弘記作、関根信一演出「きみはいくさに征ったけれど」、リーマンショックで退職した証券マンのその後を追った中津留章仁作・演出「分岐点〜ぼくらの黎明期」、近代戯曲シリーズ第3弾として高田保作、大谷賢治郎演出「宣伝」を上演した。原田マハ原作、高橋正國脚本、藤井ごう演出「キネマの神様」は名画座を舞台にした父娘の奇跡の物語。

劇団昴は、北村総一朗演出で中島淳彦作

「無頼の女房」、アレン作「冬」とバリー作「ダウィー夫人の勲章」を小笠原響演出で上演。映画でも知られる法廷劇のリード作、原田一樹演出「評決」は、宮本充らベテランの演技が光った。

劇団桟敷童子は昭和の家族を回想した「翼の卵」、劇団初の恋物語「その恋、覚え無し」（ともに東憲司の作・演出）を上演。

演劇集団キャラメルボックスは、天使から剛速球を投げる能力を得た中年男を主人公にした成井豊作・演出「エンジェルボール」や「無伴奏ソナタ」など、いつも飽きさせない。

創立30周年の東京演劇集団風は、ルーマニアからフランスに亡命したマティ・ヴィスニュックの新作「記憶の通り路」を江原早哉香が演出し、刺激的な舞台。

燐光群は、日本統治下のサイパンで暮らした女性を主人公にした坂手洋二作・演出「サイパンの約束」（渡辺美佐子）、劇団朋友は伊藤野枝と彼女を支えた叔父の物語「残の島」を詩森ろば作、西川信廣演出で上演した。テアトル・エコーは、土田英生作・演出「青い鳥たち、カゴから」は、新興宗教に集う人間模様。

プロデュース公演は活発だった。

シスカンパニーは、サルトル作、小川絵梨子演出「出口なし」（大竹しのぶ）、イプセン作、栗山演出「ヘッダ・ガブラー」（寺島しのぶ）、北村想作、寺十吾演出「お勢登場」（小泉今日子）と、女優陣が活躍した。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は、「シャンハイムーン」（野村萬斎）、「父と暮せば」（山崎一）に、長崎で被爆した母子を主人公にした井上ひさし原案、畑澤聖悟作、栗山民也演出「母と暮せば」（富田靖子、松下洸平）を初演。井上の戦後の命の三部作が見事に完結し、松下は文化庁芸術祭新人賞を受賞した。

名取事務所は別役実上演シリーズ第8弾「ああ、それなのに、それなのに」のほか、韓国の金咬貞作、寺十吾演出「渇愛」を上演。

加藤健一事務所は、ハーウッド作、鵜山演出「ドレッサー」、堤泰之作・演出「煙が目にしみる」、レイ・クーニー作、堤泰之演出「Ｏｕｔ　ｏｆ　Ｏｒｄｅｒ～イカれてるぜ！」と、加藤が奮闘した。

オフィスコットーネは、大竹野正則作、瀬戸山美咲演出「夜、ナク、鳥」、ヴェイス作、スズキ拓朗演出「ＵＳ／ＴＨＥＭわたしたちと彼ら」、ノゾエ征爾作・演出「踊るよ鳥ト少し短く」と、実験的な舞台。

拠点のパルコ劇場が閉館中のパルコステージも意欲的な活動で、「アンチゴーヌ」、マクドナー作、小川絵梨子演出「ハングマン」（田中哲司）をはじめ、ヒュディス作、Ｇ２演出「ウォーター・バイ・ザ・スプーンフル」はネットでつながる人々を描き、主演した尾上右近は現代劇初挑戦。黒柳徹子が銀座セゾン劇場時代から続けた「海外コメディーシリーズ」のファイナル公演として、ハーウッド作、高橋昌也・前川棟一演出「ライオンのあとで」、三島由紀夫作品を元にしたノゾエ征爾作・演出「命売ります」を上演した。

シーエイティプロデュース公演は、成河がモード作、千葉哲也演出の一人芝居「フリー・コミティッド」で全38役を演じ分け、スキャンロン作、小川絵梨子演出「マクガワン・トリロジー」では松坂桃李がテロリストの悲哀を滲ませた。

トム・プロジェクトは、東憲司作・演出「にっぽん男女騒乱記」（音無美紀子）、水谷龍二作、小笠原響演出「男の純情」（宇梶剛士）と、喜劇が続いた。

公共劇場は、彩の国さいたま芸術劇場が意欲的な公演「世界最前線の演劇」を始めた。第1弾はイスマエル・サイディ作「ジハード」で、テロリストになる若者の姿を描き、演出は瀬戸山実咲。続いて、イスラエル、パレスチナ、ドイツと加害者・被害者の3者が思いをぶつけあうヤエル・ロネン作「第三世代」を中津留章仁が演出。英国の高齢者劇団を招き、高齢者の舞台芸術祭典「世界ゴールド祭」を行い、ノゾエ征爾が演出したモリエール作「病は気から」は高齢者たちの生のエネルギーが舞台に満ちた。岩井秀人作・演出のゴールド・シアター公演「ワレワレのモロモロ」は、高齢者の戦争体験などを元に私的舞台を作った。「最前線」シリーズに出演した若手はネクスト・シアターのメンバーで、「ゴールド祭」

の中心となったのはゴールド・シアター。芸術監督だった蜷川幸雄氏が植えた木は、確かな実りを付けている。

神奈川芸術劇場は、レイ・ブラッドベリの小説を長塚圭史が脚色した「華氏451度」（吉沢悠）、世田谷パブリックシアターと共同制作したウォルシュ作、「バリータック」（草彅剛）ともに、芸術監督白井晃が演出した。

世田谷パブリックシアターは、現代能楽集第9弾の小野寺修二構成・演出「竹取」（小林聡美、貫地谷しほり）で、洗練された舞台を見せた。

東京芸術劇場は、唐十郎の名作を福原充則が演出した「秘密の花園」（寺島しのぶ）のほか、漫画家水木しげるをモデルにした前川知大作・演出「ゲゲゲの先生」（佐々木蔵之介）、藤田貴大作・演出「BOAT」と、中堅・若手の育成という意図が明確だった。

海外から来日した演出家では、英国のジョナサン・マンビィがイプセン作「民衆の敵」を演出。堤真一、段田安則が出演し、アンサンブルも効果的だった。「豊饒の海」はマックス・ウエブスター演出でリリカルな世界を現出させた。

海外公演は、フランスでの文化イベント「ジャポニズム」に、野田の「贋作・桜の森の満開の下」をはじめ、チェルフィッチュ岡田利規の「三月の5日間」、サンプル松井周の「自慢の息子」などが参加した。

恒例の国際芸術祭「トーキョーフェスティバル」では、アジアシリーズとして、バングラデッシュ、カンボジアの劇団が参加した。

米国の劇作家ニール・サイモンが亡くなった。サイモン作品を数多く手掛けたテアトル・エコーが酒井洋子演出で「おかしな二人」を追悼上演した。

2018年のミュージカル

横溝幸子

日本で初めてブロードウェイのミュージカル「マイ・フェア・レディ」が上演されてから55年になる。2018年のミュージカル界はブロードウェイ作品はじめウエストエンド、フランス、ウィーン、韓国作品などの初演物、再演物が入り乱れ、上演本数は限りなく多い。しかし前年の「ビリー・エリオット」のような決定打に欠けた。「ナイツ・テイル」「生きる」など日本発のオリジナル作品を作り出そうとする意欲は認められる。

劇団四季創立65周年

劇団四季は7月14日、創立65周年を迎えた。その前日の7月13日、劇団四季を一大ミュージカル劇団にのし上げた演出家浅利慶太氏が、85歳で亡くなった。アンドリュー・ロイド＝ウェバー作曲「イエス・キリスト＝スーパースター」（現在は「ジーザス・クライスト＝スーパースター」）を1973年に初演後、「エビータ」「オペラ座の怪人」などを次々ヒットさせ、「キャッツ」で日本初のロングラン公演を定着。チケットの流通革命をはかるなど日本の演劇界を改革した。浅利氏の死は、一つの時代の終わりを強く印象づけるものだった。

竹芝地区再開発で四季劇場「春」「秋」の二劇場は取り壊された。「ライオンキング」は「春」から大井町の「夏」に移動し、12月20日、日本初演20周年を迎えた。国内総公演回数は1万1732回、観客動員数は1200万人と、日本演劇史上最多記録を樹立した。「夏」と隣接するキャッツシアターでの「キャッツ」公演は東京では6年ぶり。11月11日、初演35周年を迎え、1万回達成は19年3月12日の予定だ。「オペラ座の怪人」も30周年を迎えたが、

19年1月20日から新作ミュージカル「パリのアメリカ人」が開幕する。ストレートプレイ「恋におちたシェイクスピア」(トム・ストッパード&マーク・ノーマン原作映画脚本、リー・ホール台本、青木豪演出)を6月から初演(自由劇場)したが、外部から初めて演出家を起用しての公演である。この2本の新作公演が劇団四季の今後の新しい方向性を示すものかもしれない。

次世代を担う子どものための児童招待プロジェクト「こころの劇場」も10周年になる。「魔法をすてたマジョリン」と「王様の耳はロバの耳」の2作品を北海道・利尻島から沖縄県・石垣島まで180都市452公演を行い、56万人の児童が観劇した。

18年は東京、大阪、京都、名古屋、札幌、福岡の常打ち劇場のほか、静岡、仙台、全国公演合わせて3049公演、観客動員数は3442万3500人、興行収入は前年比2億円増の223億円と好調である。

東宝は「ナイツ・テイル」に挑戦

日英合作ミュージカル「ナイツ・テイル―騎士物語―」(7月27日〜8月29日　帝国劇場、9月18日〜10月15日　梅田芸術劇場)は、採算を度外視した世界初演作品である。シェイクスピア最後の作品「二人の貴公子」(ジョン・フレッチャーとの共作)を原作にジョン・ケアード脚本・演出、ポール・ゴードン音楽・歌詞、デヴィッド・バーリンズ振付というオリジナル新作の上、帝劇で主役を張る堂本光一と井上芳雄が初共演したぜいたくな試みだ。

従兄弟同士のテーベの騎士アーサイト(堂本)とバラモン(井上)が、敵国アテネの大公シーシアス(岸祐二)の妹エミーリア(音月桂)に一目惚れ、愛を勝ちとるために決闘までするが、バラモンは牢番の娘(上白石萌音)の愛を受け入れて、それぞれがハッピーエンドで結ばれる。日本の男性社会に対するケアード流の批判をこめているが、歌唱力抜群の井上とダンス力を示した堂本とバランスがとれた舞台になった。ダイナミックな群舞が見せた。

ミュージカル界のゴールデン・トリオ、ミヒャエル・クンツェ(脚本・歌詞)、シルヴェスター・リーヴァイ(音楽・編曲)、小池修一郎(演出・訳詞)による「モーツァルト!」は4年ぶり。モーツァルトは3度目の山崎育三郎と初登場の古川雄大のWキャスト、コンスタンツェは2度目の平野綾のほか、乃木坂46の生田絵梨花、「ロミオ&ジュリエット」でデビューした木下晴香のトリプルキャストを配した。

小池修一郎はフランス・ミュージカル「1789―バスティーユの恋人たち―」(4月9日〜5月12日)も再演し、宝塚の演出のほか外部演出で引っ張りだこである。

「マリー・アントワネット」(10月8日〜11月15日)は、韓国版を演出したロバート・ヨハンソンの新演出版での再登場である。王妃マリー・アントワネット(花總まり・笹本玲奈)と同じイニシャルを持つ庶民の娘マルグリット・アルノー(ソニン・昆夏美)と2人の女性の運命を交錯させながらフランス革命を描いている。

シアタークリエには小回りのきく作品が登場した。2015年のトニー賞5部門受賞作品「ファン・ホーム―ある家族の悲喜劇」(2月7日〜26日)が早くも日本初演された。アリソン・ベクダルの自伝的なグラフィックノベル(アメリカン・コミック)を原作にリサ・クロン脚本・歌詞、ジニーン・テソーリ音楽、小川絵梨子がミュージカルを初演出した。漫画家のアリソンが父の自殺は自分がレズビアンだと告白したことが原因ではなかったかと回想する。小学生時代(子役)、大学生(大原櫻子)、現在(瀬奈じゅん)と3人のアリソンが登場する。

「ロマーレ〜ロマを生き抜いた女カルメン〜」(小手伸也原作、高橋知伽江台本・作詞、謝珠栄演出・振付、3月23日〜4月8日、東京芸術劇場プレイハウス)で情熱の女カルメンを主演した花總まりは、「シークレット・ガーデン」(6月11日〜7月11日)でアーチボルド(石丸幹二)の亡き妻リリーと動と静の役を演じた。

「ゴースト」(8月5日〜31日)は、世界的大

ヒット映画のミュージカル化(ブルース・ジョエル・ルービン脚本・歌詞、デイヴ・スチュワート&グレン・バラード音楽・歌詞、グレン・ヤップ演出)。ゴーストとなりながらも最愛の恋人モリー(咲妃みゆ・秋元才加)を守るために奮闘する浦井健治が活躍。山口祐一郎と涼風真世コンビによる「マディソン郡の橋」(3月2日〜21日)と日本初演作品が多かった。その中で収穫はグロリア・エスティファンの半生を描いた「オン・ユア・フィート!」(12月8日〜30日)である。宝塚歌劇宙組トップスターとして活躍した朝夏まなとの女優最初の舞台は神田沙也加とWキャストでイライザを演じた「マイ・フェア・レディ」(9月16日〜30日　東急シアターオーブ)だった。第二弾は初の単独主演作で、朝夏はグロリアになりきり豊かな声量とダンスで魅了。「コンガ」が盛り上がりを見せた。

再演物も「ジャージー・ボーイズ」(9月7日〜10月3日)で中川晃教が、「ピアフ」(11月4日〜12月1日)で大竹しのぶが見事な歌唱力を見せた。シアタークリエは次々初演作品をかけてヒットの可能性をさぐるにふさわしい劇場になってきた。

コメディとして笑いをとったのが「ブロードウェイと銃弾」(2月7日〜28日　日生劇場)で、ウディ・アレンの同名映画のミュージカル版。壁にぶち当たった劇作家デヴィッド(浦井健治)の脚本に口をはさみ、最後は書き直して「俺の台本だ」とうそぶくギャングのチーチを演じた城田優の迫力が実に面白かった。

初演物の大作「メリー・ポピンズ」

ホリプロ・梅田芸術劇場共同制作による「メリー・ポピンズ」(3月25日〜5月7日　赤坂ＡＣＴシアター、5月19日〜6月5日　梅田芸術劇場)の日本初演は、ディズニー映画の舞台化にふさわしかった。空から飛んできたメリー・ポピンズ(濱田めぐみ・平原綾香)の不思議な力が、バンクス家の子どもたちをとりこにしてゆく。長い言葉を口にしながら歌い踊る。マシュー・ボーンのユーモラスな振付、カラフルな色彩、「チム・チム・チェリー」などおなじみの名曲を楽しむうちに家族の絆の大切さに気づかされる。歌唱力と明晰な台詞の濱田、情味溢れる平原と対照的なポピンズ、煙突掃除役の大貫勇輔のダンスが軽やか。

柚希礼音主演の「マタハリ」(1月21日〜28日　梅田芸術劇場、2月3日〜18日　東京国際フォーラムホールＣ)、坂本昌行のジュリー・トラヴァース、ミュージカル初出演の多部未華子が共演した「ＴＯＰ　ＨＡＴ」(11月5日〜25日　東急シアターオーブ、12月1日〜5日　梅田芸術劇場)は全体に盛り上がりに欠けたのが残念だった。

フェデリコ・フェリーニ監督映画「道」をデヴィッド・ルヴォーが音楽劇として演出した(12月8日〜28日　日生劇場)。草彅剛のザンバノ、初舞台の蒔田彩珠のジェルソミーナ、海宝直人の綱渡り芸人という顔合わせが話題にはなったが、デヴィッド・ルヴォーらしいひらめきはあまり感じられなかった。

ホリプロ制作「リトル・ナイト・ミュージック」(4月8日〜30日　日生劇場)は、風間杜夫の弁護士、大竹しのぶの女優デジレで上演したが、かつての越路吹雪を越えられなかった。ハリウッドを舞台に映画製作の裏側を描いた「シティ・オブ・エンジェルズ」(9月1日〜17日　新国立劇場中劇場)と話題の初演作が多かったが、意外の収穫は小劇場ブームを築いたかつての第三舞台、現在は虚構の劇団を主催する鴻上尚史による演劇ユニット　ＫＯＫＡＭＩ@Ｎｅｔｗｏｒｋの「ローリング・ソング」(鴻上尚史作・演出、森雪之丞作詞・音楽監修)が、懐しのロックと共に夢に翻弄される三世代の男たちの物語を紡ぎ出した。中山優馬、松岡充、中村雅俊の異色顔合わせで熱のこもった舞台を生み出した(8月11日〜9月2日　紀伊国屋サザンシアター)。

自閉症のサヴァン症候群の青年タカシとその家族の心温まる物語を描いた「Ｉｎｄｉｇｏ　Ｔｏｍａｔｏ」(小林香作・演出)は小品ながら、膨大な数字の台詞をしゃべり続ける平間壮一の台詞術、暗記力に驚かされた(5

月23日〜30日、博品館劇場）。

オリジナル作品「生きる」「日本の歴史」

ホリプロが黒澤明監督の代表作「生きる」をミュージカルに仕立て上げた。高橋知伽江脚本・歌詞、作曲・編曲はミュージカル「ビューティフル」の音楽監督でグラミー賞を受賞したジェイソン・ハラウンド。宮本亜門演出で、日本発のオリジナル・ミュージカルとして初のブロードウェイ進出を目指している。

30年間、まじめに市役所に勤め、定年間近の市民課長・渡辺勘治が、胃がんで余命わずかと悟る。後輩の小田切とよ（May'n／唯月ふうか）に「何か作ったら」と言われて市民から陳情を受けた公園作りに捧げる決意をする。映画で志村喬が演じた勘治は、「ラ・カージュ・オ・フォール」（3月9日〜31日　日生劇場）で華やかな同性夫婦役を演じた鹿賀丈史と市村正親がWキャストで演じた。鹿賀は自然体で、市村はスターのオーラを消して演じきった。ブランコに乗り「ゴンドラの唄」を歌うラストシーンは映画同様印象に残った（10月8日〜28日　赤坂ACTシアター）。

シスカンパニー制作「日本の歴史」（三谷幸喜作・演出、荻野清子音楽・演奏）は、これまでにない奇智に富んだ作品になった。卑弥呼の時代から第二次世界大戦まで1700年の日本の歴史と米テキサスの地主一家と小作人一家の物語が交錯する。二つの家族が移り変わる姿と日本の歴史上の人物が巧みに結びつく。出演者はミュージカル初出演の中井貴一のほかは香取慎吾、新納慎也、川平慈英、シルビア・グラブ、宮澤エマ、秋元才加の7人で、一人が何役も早替わりする。宮澤が坊主頭の平清盛を演じたかと思うと中井が女帝の孝謙天皇を演じる。最後に対決するのが第二次大戦の日本人とテキサス一家の一人と見事に内容がつながる。

工夫をこらす再演作品

ファミリー向けの「アニー」は33年目、「ピーターパン」は37年目を迎えた。10代目ピーターパンは吉良咲良。2001年初演から7演目の「ジキル&ハイド」（レスリー・ブリッカス脚本・作詞、フランク・ワイルドホーン音楽、山田和也演出）は、石丸幹二のジキルは三度目だが、これまで婚約者エマ役の笹本玲奈が娼婦ルーシーに、エマに宮澤エマと配役が少しずつ変わる（3月3日〜18日　国際フォーラム　ホールC）。

ホリプロの「スリル・ミー」（ステファン・ドルギノフ脚本・音楽・歌詞、栗山民也演出）は2011年の初演以来6度目。凶悪な誘拐殺人事件を基に〝私〟と〝彼〟の二人ミュージカルに仕立てた濃密な心理劇。成河と福士誠治の初演組、松下洸平と柿澤勇人の再演組の競演は微妙な相違があり、Wキャストの面白さを味わった（12月14日〜19年1月14日　東京芸術劇場シアターウエスト）。

再演での大きな冒険は「るろうに剣心」（和月伸宏原作、小池修一郎脚本・演出）だった。人斬り抜刀斎と恐れられた緋村剣心を16年に宝塚雪組で演じたトップスターの早霧せいなが宝塚を退団、「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」で女優としての第一歩を踏み出したが、松竹制作の舞台で男優を相手に剣心を主演した（10月11日〜11月7日　新橋演舞場、11月15日〜24日　大阪松竹座）。剣心と敵対する加納惣三郎（松岡充）、元新撰組隊士（廣瀬友祐）、隠密御庭番衆（三浦涼介）などを相手にした早霧は、立廻り場面でも剣に冴えを見せ、宝塚とはまた違った見応えある舞台を作り出した。

新感線の「メタルマクベス」（宮藤官九郎脚本、いのうえひでのり演出）は、17年春、豊洲に誕生した客席が360度回転するIHIステージアラウンド東京で上演したため、06年の初演とは大きく変わった。ヘヴィメタルが炸裂し、広い舞台を出演者は走り回っての熱演だった。disc1（7月23日〜8月31日）ではランダムスター夫妻は橋本さとしと濱田めぐみ、disc2（9月15日〜10月25日）は尾上松也・大原櫻子、disc3（11月9日〜12月31日）は浦井健治・長澤まさみの3組が全力疾走した。

草笛光子がライフワークとしている「6週

間のダンスレッスン」（リチャード・アルフィエリ原作、鈴木勝秀上演台本・演出、名倉加代子振付）は相手役が松岡昌宏に代わり、振り付も工夫しての上演（9月29日～10月21日よみうり大手町ホール）だった。

イッツフォーリーズが久し振りに「死神」（今村昌平原作、水谷龍二脚本、鵜山仁演出）を上演したが、いずみたくの音楽が懐しかった（4月17日・18日　紀伊国屋サザンシアター）。ミュージカル座が新作、再演とりまぜて年間に19本を上演した。

充実した宝塚歌劇団

宝塚歌劇団は本拠地の宝塚大劇場も東京宝塚劇場も、全5組ともチケット入手困難の盛況ぶりで、東西合わせて観客動員数は初めて300万人を越えた。2018年は珍しくトップスターの退団がない年だった。宝塚104年の歴史の中で最も若い組である宙組が、発足20周年を迎えた。節目の年の新トップスターは、長身の真風涼帆と小柄の星風まどか。真風は初代トップの座についた姿月あさとから数えると8代目になる。トップお披露目演目は「天（そら）は赤い河のほとり」（篠原千絵原作、小柳奈穂子脚本・演出）とロマンチック・レビュー「シトラスの風」（岡田敬二作・演出）。宙組発足時に書き下ろした舞台をもとにしたレビューらしい作品だ（3月16日～4月23日　宝塚大劇場、5月11日～6月17日　東京宝塚劇場）。

小池修一郎が30年間劇化を夢見続けてきた作品「ポーの一族」（萩尾望都原作）が花組トップの明日海りおを得て上演が実現した。明日海には少年性と神秘性があり、吸血鬼伝説にはぴたりと言われたように、明日海のエドガーの美しさは絶品。エドガーに誘われてバンパイヤになる柚香光のアランも輝いていた（1月1日～2月5日　宝塚大劇場、2月16日～3月25日　東京宝塚劇場）。

小池修一郎の大ヒット作「エリザベート」（ミヒャエル・クンツェ脚本・歌詞、シルヴェスター・リーヴァイ音楽）は、宝塚では10回目。月組トップの珠城りょう・愛希れいかコンビで上演されたが、愛希は11月18日の東京宝塚劇場の千秋楽で退団した。次のトップ娘役は美園さくらに決まった。

専科トップの轟悠は「ドクトル・ジバゴ」（原田諒脚本・演出）に続き、雪組公演「凱旋門」（柴田侑宏脚本、謝珠栄演出・振付）でドイツからパリに亡命した医師ラヴィックを18年ぶりに演じた。恋人をゲシュタポに殺された心の闇と切なさを出し、実力を示した（6月8日～7月9日　宝塚大劇場、7月27日～9月2日　東京宝塚劇場）。

何でもありの宝塚は、星組トップ紅ゆずるの三枚目ぶりを生かした「ＡＮＯＴＨＥＲ ＷＯＲＬＤ」（谷正純作・演出）という落語ミュージカルまで上演した。「地獄八景亡者戯」「崇徳院」など落語ネタをもとにした地獄めぐり（4月27日～6月4日宝塚大劇場、6月22日～7月22日東京宝塚劇場）。紅は異次元武侠ミュージカル「Ｔｈｕｎｄｅｒｂｏｌｔ Ｆａｎｔａｓｙ 東離剣遊紀」（虚淵玄原案・脚本・総監修、小柳奈穂子脚本・演出）とタカラヅカ・ワンダーステージ「Ｋｉｌｌｅｒ Ｒｏｕｇｅ／星秀☆煌紅」（斎藤吉正作・演出）を日本青年館（9月13日～24日）公演後、3年ぶり3回目の台湾公演を行なった。台北市の国家戯劇院（11月2日～5日）で14回、高雄市の至徳堂（11月2日～5日）で6回、計20回公演でいずれも好評を博した。

2018年の退団者は専科の沙央くらま、飛鳥裕、星条海斗、月組組長の憧花ゆり、娘役トップ愛希れいかはじめ29人。愛希の退団で2014年の100周年記念式典時の5組トップコンビ全員が退団したことになる。

「霧深きエルベのほとり」のカール役の順みつき（4月17日）、「ベルサイユのばら」でマリー・アントワネット役の上原まり（8月24日）が亡くなった。

変質するか？ジャニーズ公演

帝劇は5カ月ジャニーズ公演で若い女性観客に占拠される。「ジャニーズ Ｈａｐｐｙ Ｎｅｗ Ｙｅａｒ アイランド」（1月1日～27日）、20年続く堂本光一の「Ｅｎｄｌｅｓｓ ＳＨＯＣＫ」（2月4日～3月31日）、玉森裕

太らの「ドリームボーイズ」(9月6日〜30日)、「ジャニーズ King&Prince アイランド」(12月6日〜1月27日)と続いた。日生劇場ではSix Tons Snow Manらの「少年たち　そして、それから…」(9月7日〜28日)、ABC座「ジャニーズ伝説2018」(10月7日〜29日)、シアタークリエではHiHi Jets、東京B少年による「ジャニーズ銀座2018」(4月29日〜6月3日)と若手が次々登場する。

滝沢秀明による和のエンターテインメント「滝沢歌舞伎」(4月5日〜5月13日　新橋演舞場)が一つの区切りをつけた。今井翼との「タッキー&翼」が9月1日付で解散すると発表された。今井はメヌエル病のためジャニーズ事務所をやめ病気療養につとめ、滝沢は年内で現役を引退、2019年からジャニー喜多川を手伝い、プロデューサー兼演出家になる。19年4、5月は「滝沢歌舞伎ZERO」として滝沢は演出を担当、Snow Manと関西ジャニーズJr.が出演する。世代交替の第一弾だ。

大作揃う来日公演

東急シアターオーブで来日公演が相ついだ。ティム・ライス作詞、アンドリュー・ロイド=ウェバー作曲「エビータ」(7月4日〜29日)は、ハロルド・プリンス演出の初演版。日本で人気のあるラミン・カリムルーが「チェ」役で特別出演した。ジョナサン・ラーソン脚本・作詞・作曲「レント」(8月1日〜12日)は2年ぶり。マイケル・ベネット原案・演出・振付、バイヨーク・リー演出・振付、マーヴィン・ハムリッシュ音楽「コーラスライン」(8月15日〜26日)は7年ぶりの再来日公演である。ケン・ヒル版「オペラ座の怪人」(8月29日〜9月9日)、マシューボーンの「シンデレラ」(10月3日〜14日)と大作が相ついだ。ダンスエンターテインメントが売り物の「バーン・ザ・フロア」(5月17日〜21日)は10回目の来日で人気は衰えない。

ミュージカル・ベスト10

2018年のミュージカル界の傾向を知る上で、「ミュージカル」誌選出(評論家・ジャーナリスト23名)の「ミュージカル・ベスト10」が参考になる。

「作品BEST10」の第1位はホリプロ・東宝・TBS・梅田芸術劇場製作、東急シアターオーブで上演された「メリー・ポピンズ」(演出・リチャード・エア)に決まった。第2位以下は「日本の歴史」(シス・カンパニー演出・三谷幸喜)「ナイツ・テイル―騎士物語―」(東宝　演出・ジョン・ケアード)「生きる」(ホリプロ・TBS・東宝・WOWOW演出・宮本亜門)「ブロードウェイと銃弾」(東宝・ワタナベエンターテインメント　演出・福田雄一)「マリー・アントワネット」(東宝演出・ロバート・ヨハンソン)「オン・ユア・フィート!」(東宝　演出・上田一豪)「ポーの一族」(阪急電鉄・宝塚歌劇団　演出・小池修一郎)「FUN HOME」(東宝　演出・小川絵梨子)「ドクトル・ジバゴ」(阪急電鉄・宝塚歌劇団　演出・原田諒)

再演賞「ジャージー・ボーイズ」(東宝・WOWOW　演出・藤田俊太郎)

演出家賞　小池修一郎(「1789」「ポーの一族」「るろうに剣心」「モーツァルト!」「エリザベート」)

「男優BEST10」の第1位は中川晃教(「ジャージー・ボーイズ」「サムシング・ロッテン!」)。第2位以下は井上芳雄(「ナイツ・テイル」)市村正親(「生きる」「ラ・カージュ・オ・フォール」他)石丸幹二(「シークレット・ガーデン」「ジキル&ハイド」他)城田優(「ブロードウェイと銃弾」)浦井健治(「ゴースト」「ブロードウェイと銃弾」他)川平慈英(「日本の歴史」「ショーガール」)堂本光一(「Endless SHOCK」「ナイツ・テイル」)山崎育三郎(「モーツァルト!」)大貫勇輔(「メリー・ポピンズ」)

「女優BEST10」の第1位は濱田めぐみ(「メリー・ポピンズ」「メタルマクベス」)。第2位以下はソニン(「マリー・アントワネット」「1789」)大竹しのぶ(「ピアフ」「リトル・ナイト・ミュージック」)朝夏まなと(「オン・ユア・フィート!」「マイ・フェア・レディ」)

2018年・地方演劇

森　洋三

花總まり（「マリー・アントワネット」「シークレット・ガーデン」他）シルビア・グラブ（「日本の歴史」他）轟悠（「ドクトル・ジバゴ」「凱旋門」）平原綾香（「メリー・ポピンズ」）明日海りお（「ポーの一族」「MESSIAH」他）早霧せいな（「るろうに剣心」「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」）

地震台風、集中豪雨で相次いだ公演中止

二〇一八年の漢字「災」が示すように日本列島は天災に見舞われた。六月十八日の高槻市などを震源とする「大阪府北部地震」、六月二十八日～七月八日の「平成30年7月豪雨」、九月六日の「北海道胆振東部地震」。加えて八月十八日の台風20号、二十八日の21号、九月三十日の24号と「大型台風」が日本列島に吹き荒れた。

「大阪府北部地震」では公演中だった大阪松竹座の音楽劇「マリウス」昼の部、国立文楽劇場「文楽鑑賞教室」、よしもと系劇場がそれぞれ中止、宝塚大劇場の雪組「凱旋門」はアクセス支障で来場できなかった観客へのチケット払い戻し…。建物被害では吹田市のメイシアター大ホールが天井の釣り具湾曲で使用中止、九月末で閉館予定だった川西市文化会館大ホールが客席ゆかの亀裂、コンクリート落下で利用中止になったほか、多くの文化会館などに雨漏り、壁やタイル破損が相次いだ。「北海道胆振東部地震」では教文演劇フェスの短編演劇祭（九月八日）、グランドチャンピオン・ステージ（九日）の緊急中止。グランドチャンピオン・ステージは十一月三十日に札幌市教育文化会館大ホールで振替公演が行われたが、スケジュール調整で参加できなかった劇団も出た。

「7月豪雨」「大型台風」では岡山・高梁市総合文化会館で予定していた公文協歌舞伎西コース巡業中の片岡愛之助らの歌舞伎公演や兵庫・宝塚大劇場の月組ミュージカル「エリザベート」、野村万作・萬斎の広島・厳島神社奉納「宮島狂言」、ツアー中だったヨーロッパ企画の愛媛・西条市丹頂文化会館大ホール公演「サマータイムマシン・ワンスモア」などが中止になり、大阪・梅田芸術劇場のミュージカル「ナイツテイル～騎士道物語」でも公演延期の措置を取った。

国公立大学初の演劇を正課とする兵庫県立国際観光芸術大学誕生へ

「明」の話題では八月下旬に兵庫県の井戸敏三知事が記者会見で明らかにした豊岡市を予定地とする演劇と観光の四年制専門職大学「国際観光芸術専門職大学（仮称）」の構想だ。国公立大学で演劇を正課に持つ全国初の大学ということになる。専門職大学は二〇一七年五月の学校教育法改正で創設された高等教育機関。知事構想によると「舞台芸術の学習で得た能力を基礎に、芸術文化を通じた新たな価値を創造できる専門職業人の育成」を目的に一学部一学科、留学生を含め一学年の定員八十人。全員が寮生活しながら演劇コミュニケーション演習を履修、それをベースに実践理論も学び、地域の発展と国際社会の形成に貢献する大学を目指す。JR山陰本線豊岡駅南側のキャンパス予定地には劇場やスタジオも設け二一年四月開校を目指して準備が進んでいる。学長には井戸知事の要請で但馬地域専門職大学設立準備委員会委員長を務める劇団青年団主宰者の平田オリザが予定されている。平田は一九年に同大学開設プレイベントとして国際演劇祭開催も計画している。

豊岡市は日本海に面した兵庫県北部（但馬）の中心都市で人口約八万人。日本で最後の野生コウノトリの生息地、平安時代からの歴史を持ち七十軒以上の温泉宿が軒を並べる城崎温泉で知られる。市内にはコウノトリ但馬空港も開港、大阪（伊丹）・東京（羽田）へＪＡＬ一日二便が就航している。こういった観光的な背景に加えて近年、演劇界で注目を集めているのが一四年に開設され平田が芸術監督を務める「城崎国際アートセンター」と、百年以上の歴史を持つ歌舞伎劇場「永楽館」だ。

城崎国際アートセンターは城崎温泉街に位置する舞台芸術を中心としたアーチスト・イン・レジデンス（滞在型の創造活動）の拠点で、ホール・スタジオ・宿泊施設を持ち、一八年度は二十カ国から応募六十八件（採択十七件）があった。直径六・六メートルの回り舞台や花道、すっぽんを持つ永楽館は一九〇一（明治三十四）年に竣工、かつては上方歌舞伎や宝塚歌劇公演なども行われてきた。昭和末期に閉鎖されたが平成に入って再開、二〇〇八年に明治の創建時の姿に復元された。現在では片岡愛之助を座長とする〝永楽館歌舞伎〟が恒例となり、城崎国際アートセンター滞在の劇団公演にも活用されている。

青年団の豊岡集団移住

豊岡市をめぐるこうした演劇的状況の中で演劇界にとって衝撃的な出来事が平田オリザ率いる青年団の豊岡集団移転だろう。昨年秋すでに青年団ブログで平田自身が明らかにしていたが、国際観光芸術専門職大学（仮称）創立と足並みをそろえるように一九年には一足早く平田が移住、二〇年四月以降に劇団の中枢機能を豊岡に移し、約百二十人の劇団員のうち数十人が移転する予定という。青年団の新しい拠点となるのは豊岡市商工会館。改装して二〇年三月に劇場兼劇団事務所として完成させる。

東京の劇団が地方へ集団移転した前例には一九七六（昭和五十一）年、鈴木忠志率いる早稲田小劇場（現ＳＣＯＴ）の富山県利賀村（現南砺市利賀村）移転がある。ＪＲ高山線越中八尾駅からバスで一時間、人口わずか千五百人足らずの僻地に合掌造りの民家を劇場（利賀山房）に改装してスタート。六年後にギリシャ風の野外劇場を新設して日本初の世界演劇祭「利賀フェスティバル」を開催、現在では六劇場・稽古場・宿舎を擁する「世界のＴＯＧＡ」として世界演劇の聖地になった。一九年夏には日本・ロシア共同開催の第九回シアター・オリンピックスが利賀村・黒部宇奈月（鈴木忠志芸術監督）、サンクトペテルブルク（ヴァレリー・フォーキン芸術監督）で開催される。

ＳＣＯＴの無一物からの僻地移転に比べると、平田・青年団の移転は芸術監督を務める「城崎国際アートセンター」、芸術文化参与も務める豊岡市のバックアップ、学長候補になっている国際観光芸術専門職大学（仮称）開校、市内に位置する但馬空港というアクセス、城崎温泉の大宿泊地（利賀フェスの初期には観客は民宿での相部屋だった）、劇団員のアルバイト先など用意周到のプランといえそうだ。平田は内閣府を主務官庁とする公益財団法人舞台芸術財団演劇人センター（鈴木忠志理事長）の理事、同センターが夏に開催する「利賀演劇人コンクール」審査委員長も務める。

京都――文化庁移転、アーツシード、市立芸大移転

周知のように文化庁が二〇二一年度末までに京都へ全面移転、文化庁長官をはじめ職員の七〇％が配置される。すでに京都市内に先遣組織の「地域文化創生本部」が発足、戦略的な国際文化交流をはじめ移転をきっかけに京都を軸にしたさまざまな施策、イベントなど関西の文化活性化に拍車がかかる。

京都市は二三年度を目標に約八百席のホールを備える京都市立芸術大学（美術学部、音楽学部。演劇関係部はない）を京都駅東側に移転させるが、文化庁移転と軌を一にするように「京都駅東南部エリア活性化方針」を打ち出した。「芸術」と「若者」をキーワードに様々な活性化事業が期待されている。

相次ぐ小劇場撤退に危機感を抱いて京都演

劇人たちが立ち上がったアーツシード京都（あごうさとし代表理事）の続報を。建設中の客席約百人収容の小劇場「Ｔｈｅａｔｒｅ Ｅ９ Ｋｙｏｔｏ」は前記の京都駅東南部エリア活性化地域に含まれ、地域活性化の大きな役割も担うことになった。一九年夏の開場が予定されているが、工事費一億三千万円のうち不足分約三千万円の寄付協賛を呼び掛けている。初年度のラインナップも発表され、京都国際舞台芸術祭、茂山あきら狂言特別公演、劇団では地点、笑の内閣、したため、壁の花団、青年団などがこけら落としに参加する。

盛んな地方劇団の全国ツアー

劇団こふく劇場（宮崎・都城市）やヨーロッパ企画（京都市）の十都市全国ツアーをはじめ元気な地方劇団のツアー公演が目立った。そんな中で島根県雲南市を拠点にする劇団ハタチ族の代表・西藤将人が十月二十二日の北海道公演を皮切りに十二月二十八日の島根公演までわずか二カ月ちょっとの短期間に西藤のひとり芝居「10万年トランク」（樋口ミユ作・演出、約六〇分）で全国四十七都道府県＋島根県十九市町村ワンマンツアーを完遂した。入場料の基本は投げ銭制、会場は立ち飲み屋やカフェから客席五百人近い劇場まで様々だった。この破天荒な全国ツアーは、雲南市に全国の演劇人を集めて毎日芝居をする夢の劇場をつくるためのアピール公演という。二〇一三年に立ち上げた劇団ハタチ族はメンバー五人の小劇団だが、西藤は一五年には「観客がゼロの日があればストップ」というルールで三百六十五日連続公演も行い、一年間で約四千七百人の動員実績をあげた。

劇団ではないが、一六年二月に公演初日に著作権問題で中止された宮崎県立芸術劇場プロデュースのブレヒト作「三文オペラ」（谷川美智子訳、永山智行演出）が六月二十二～二十四日にメディキット県民文化センター演劇ホールで劇団ブルーエゴナク（北九州市）の穴迫信一、劇団こふく劇場（宮崎・都城市）のかみもと千春ら九州在住の俳優を起用して無事に上演されたことも記しておく。

このほか第３回神奈川かもめ短編演劇祭が一月に神奈川芸術劇場で韓国ソウルの劇団同感を含め八劇団・チームが出場して開催された。同演劇祭は一九年度から「神奈川かもめ短編演劇フェスティバル」と名称を改めて開催される。シニア劇団では彩の国さいたま芸術劇場などで「世界ゴールド祭２０１８」が九～十月に開かれ英国、オーストラリア、シンガポールのカンパニー、地元のさいたまゴールド・シアターの六チームが出演してシニアパワーを披露。またユニークな活動として認定ＮＰＯ法人ニコちゃんの会（福岡市）が十二月二十一～二十三日にゆめアール大橋大練習室で行った電動車いすが観客のまわりを走る太宰治原作「走れメロス」（倉品淳子構成・演出）上演を付記する。

半世紀以上を地方演劇に貢献した演劇人の訃報も相次いだ。劇団創立メンバー・劇作家で劇団群馬中芸（前橋市）の元代表・中村欽一が一月三十日、心機能不全で死去、八十四歳。「パナンペ・ペナンペむかしがたり」「おばあちゃんは宇宙人？」などの作品を残している。やはり劇団創立メンバーで五十六年間代表を務めた劇団未来（大阪市）の演出家・森本景文が四月二十日に虚血性心疾患で死去、八十一歳。劇団いこら（和歌山県吉備町、二〇〇四年解散）創立メンバーで、五十五年間劇団代表を務め、演劇集団和歌山生みの親でもある劇作家の栗原省が八月十五日、肺がんのため死去。八十九歳。同和問題、民話シリーズを演劇で提起した。

最後に地域で根を据えて頑張る老舗劇団やユニークな活動を行なっている劇団を中心にその一端を。

［上半期］（一月）十九～二十一日、関西芸術座（大阪市）がＡＢＣホールで創立六十周年記念のシェークスピア作「十二夜」（勇來佳加脚本、松本昇三演出）を、二十・二十一日、劇団道化芝居（岐阜・可児市）が瑞穂市あじさいホールで「本能寺ＧＡ変」（纐纈徹作・演出）

を。二十七・二十八、二月三・四日、劇団四紀会(神戸市)が元町賑わい座でつかこうへい作「熱海殺人事件〜鎮魂歌」(くるひたかし脚色、村井伸二演出)を上演。(二月)七〜十二日、弦巻楽団(札幌市)が市教育文化会館小ホールで「ユー・キャント・ハリー・ラブ!」(弦巻啓太脚本・演出)を、十・十一日、劇団芝居屋かいとうらんま(岐阜・大垣市)が瑞穂市サンシャインホールで「ジュリアーノのハニートラップ」(後藤卓也脚本、蒙古斑演出)を。十一日、劇団やまなみ(山梨・北杜市)が山梨県立文学館で関千枝子原作「原爆で死んだ級友たち〜広島第二県女二年西組」(河野通方脚色、久保勝演出)を、二十三〜二十五日、劇団名芸(名古屋市)が劇団稽古場で「父と暮せば」(井上ひさし作、長田芳枝演出)を上演。(三月)三日、劇団上野市民劇場(三重・伊賀市)がサンピア伊賀研修室で「薄墨色の桜たち」(小島真木作、ふくきたわかつ演出)を、十・十一日、B−LUCKS♪(広島市)が広島市青少年センターアングラ劇場で朗読劇「十一人座が見たさくら隊」(甲斐順平作・演出)を上演。(四月)二十〜二十二日、劇団ドラマシアターども(北海道・江別市)がどもⅣで「トド山第三分教場〜ヨッコの場合」(安念智康作、ども演出)を、二十一・二十二、二十八・二十九日、劇団からっかぜ(浜松市)が劇団アトリエで小川洋子原作「博士の愛した数式」(福山啓子脚色、布施佑一郎演出)を、二十八・二十九日、演劇集団和歌山(和歌山市)が和歌山県民文化小ホールで「イノセント・ピープル」(畑沢聖悟作、山入桂吾演出)をそれぞれ上演。(五月)十一〜十三日、劇団よこはま壱座(横浜市)が神奈川芸術劇場大スタジオで「紙屋町さくらホテル」(井上ひさし作、濱田重行演出)を。十八〜二十日、劇団息吹(東大阪市)が東大阪イコーラムホールで創立六十周年記念公演「ザ・シェルター」(北村想作、坂手日登美演出)を、十九日、劇団名芸(名古屋市)が天白文化小劇場で「新説ももたろう☆きびきびっときびだんご」(ナオミ作、近藤亜由美演出)を上演。(六月)二・三日、岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)が岡崎市せきれいホールで創立五十周年記念公演「法王庁の避妊法」(飯島早苗・鈴木裕実作、小森広貴演出)を、二・三日、劇団きづがわ(大阪市)がリバティおおさかでフクシマ・シリーズ第二弾「愛と死を抱きしめて」(高木達作、林田時夫演出)を。八〜十日、劇団大阪(大阪市)が一心寺シアター倶楽で「見よ、飛行機の高く飛べるを」(永井愛作、吉田美彦演出)を、十三〜十七日、劇団はぐるま(岐阜市)が御浪町ホールで「暗いところからやってくる」(前川知大作、糸永しのぶ演出)を、十五〜十七日、劇団新劇場(札幌市)がターミナルプラザことにパトスで「見果てぬ夢」(堤泰之作、山根義昭演出)を。十五〜十七日、劇団壱劇屋(大阪・枚方市)がABCホールで「独鬼〜hitori oni」(竹村晋太朗作・演出・殺陣)を。十六日、劇団静芸(静岡市)が静岡市民会館中ホールで創立七十周年記念公演「海を渡る娘」(小島真木作、中川正臣演出)を、十六・十七日、劇団演集(名古屋市)が愛知県芸術文化センターで創立七十年記念公演「林の中のナポリ」(山田太一作、狩野恭光演出)を上演。十六・十七日、劇団ドリームチョップ(石川・野々市市)が金沢市民芸術村ドラマ工房で「王様の耳は驢馬の鼻」(井口時次郎作・演出)を、二十八〜七月四日、札幌座(札幌市)がシアターZOOで「フレップの花、咲く頃に」(山田百次作、斎藤歩演出・作曲)をそれぞれ上演。

[下半期](七月)六〜八日、劇団大阪シニア演劇大学豊麗線(大阪市)が谷町劇場で水上勉原作「ブンナよ、木からおりてこい」(小松幹生脚本、和田幸子演出)を、二月二十二日、劇団やまなみ(山梨・北杜市)が笛吹市スコレーセンターで「桃子のショパン」(河野通方作・演出)を。(八月)二十七・二十八日、ギンギラ太陽's(福岡市)が天神劇場で「天神ビッグ・バン!バン!バン!bom.4〜解体と共に去りぬ」(大塚ムネト作・演出)を上演。(九月)一日、特定非営利活動法人あしぶえ(島根・八雲村)が岩手県・銀河ホールで宮沢賢治作「セロ弾きのゴーシュ」(園山土筆構成・演出)を、七〜九日、関西芸術座(大阪市)がABCホールで鶴島緋沙子作「トミーの夕

陽」(宮地仙脚色、門田裕演出)を上演。(十月)十九〜二十一日、劇団レトルト内閣(大阪市)が近鉄アート館でカーニバル音楽劇「まつりGORIN」(脚本・演出・音楽・三名刺繍)を、二十日、劇団山形(山形市)が市中央公民館で「パートタイマー・秋子」(永井愛作、平野礼子演出)をそれぞれ上演。(十一月)九・十日、劇団支木(青森市)がアウガAV多機能ホールで創立五十五周年記念公演「雪女〜雪中行軍事件から10年後」(田辺典忠作・演出)を、九〜十一日、劇団名古屋(名古屋市)が愛知県芸術文化センターで吉村登原作「空白のカルテ〜ハンセン病強制隔離に抗した医師・小笠原登」(ごとうてるよ台本、久保田明演出)を上演。十・十一日、十六〜十八日、劇団大阪(大阪市)が谷町劇場で井上光晴原作「明日〜tomorrow」(小松幹生脚色、堀江ひろゆき演出)を、十五〜十九日、劇団オイスターズ(名古屋市)が七ツ寺共同スタジオで「調子に乗れ!」(平塚直隆作・演出)を。十六〜十八日、劇団演劇関係いすと校舎(福岡市)が自宅劇場・守田ん家で「ちっちゅうのララバイ。」(守田慎之介作・演出)を、十六〜十八日、二十二〜二十四日、京浜協同劇団(川崎市)がスペース京浜で創立六十周年記念として深沢七郎原作「おりん〜楢山節考より」(和田庸子脚本・演出)を上演。十六〜二十日、劇団きらら(熊本市)がギャラリーキムラで「気持ちいい穴の話」(池田美樹作・演出)を、十七日、劇団だいこん座(山形・鶴岡市)が中央公民館市民ホールで「ゴロゴロ五郎太落っこちた」(サトウヒデキ作、石川富志夫演出)を上演。十七・十八日、岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)が岡崎市せきれいホールで「夕鶴」(木下順二作、神谷浩演出)を、二十三・二十四日、劇団息吹(東大阪市)が創立六十周年記念公演として荒本人権文化センターで「地獄の釜の湯加減」(窪田吉宏作、木田昌秀演出)を上演。二十四・二十五日、劇団津演(三重・津市)が津リージョンプラザお城ホールでメーテルリンク原作「半分、青い鳥」(西田久光脚本、山本賢司演出)を。三十〜十二月二日、七〜九日、劇団かすがい(兵庫・尼崎市)がコミュニティーシアターAQで「あれから」(佐藤太朗作、門田裕演出)を、三十〜十二月九日、劇団未来(大阪市)が創立五十五周年記念・森本景文追悼公演「やっぱり好きやねん」(和田澄子作、しまよしみち演出)をそれぞれ上演。(十二月)一・二日、劇団名芸(名古屋市)が天白文化小劇場で「紙屋町さくらホテル」(井上ひさし作、柘倫司演出)を、八・九日、劇団弘演(青森・弘前市)が市文化会館大ホールで「広くてすてきな宇宙じゃないか」(成井豊作、秋本博子演出)を。十五・十六日、劇団きづがわ(大阪市)がリバティーおおさかで創立五十五周年記念公演に吉橋通夫原作「鶴彬—暁を抱いて」(佐伯洋、西村康悦、松本喜久夫脚本、林田時夫演出)を、十五・十六日、劇団どろ(神戸市)が劇団アトリエでブレヒト作「ファッツアー」(本多弘典訳、合田幸平演出)をそれぞれ上演。

二〇一八年・テレビドラマの回顧

鈴木嘉一

NHK連続テレビ小説の人気揺るがず

二〇一八年もまた、NHKの朝の連続テレビ小説(朝ドラ)の好調が続いた。サッカー・ワールドカップのロシア大会や平昌(ピョンチャン)冬季五輪などのスポーツ中継がずらりと並ぶ年間の高視聴率番組ベスト30のうち、ドラマの三本はすべて朝ドラで占められた。

NHK大阪放送局が三作続けて実在の女性実業家を主人公に据えた一七年度後期の「わ

ろてんか」(吉田智子脚本)では、吉本興業の創業者・吉本せいがモデルになった。ヒロインのてんには新人の葵わかなが起用され、その周囲を夫役の松坂桃李、両親役の遠藤憲一と鈴木保奈美、鈴木京香、高橋一生、広瀬アリスらが固めた。平均視聴率は二〇・一％（ビデオリサーチ調べ、関東地区）で、一五年度後期のヒット作「あさが来た」以来の二〇％台を保った。

実在の人物をモデルとする路線は、結末がわかっているサクセスストーリーとなるだけに、安心して楽しめる一方、マンネリ化する嫌いもある。そんな中、一八年度前期の「半分、青い。」は現代を舞台にした異色作だった。

岐阜県の田舎町で育ったヒロインの楡野鈴愛（永野芽郁）は左耳の聴力をなくしても、明るさと行動力は失わない。漫画家をめざして上京し、孤高の漫画家（豊川悦司）に弟子入りする。念願のデビューは果たしたが、自分の才能に限界を感じ、百円ショップでアルバイトをする。映画監督志望の青年（間宮祥太朗）と一緒になり、長女を出産したものの、結婚生活はうまくいかない。挫折や失敗を繰り返しながら、何事にも全力で取り組んでいく姿が描かれた。

一九七〇年代から平成の時代が背景となり、当時の音楽やファッション、流行現象がふんだんに取り込まれた。先がまったく読めず、意外性や飛躍のある展開は、インターネットなどで賛否両論を呼んだ。「ラブストーリーの名手」という定評がある北川悦吏子の脚本だけに、同じ日に同じ産院で生まれた幼なじみの律（佐藤健）との仲がどうなるか、というラブストーリーの要素も視聴者の関心を集めた。鈴愛の両親役の滝藤賢一、松雪泰子、祖父母役の中村雅俊、風吹ジュンのほか、谷原章介、原田知世らが共演した。視聴率は最高で二四・五％、平均では二一・二％だった。

大阪放送局が制作する一八年度後期の「まんぷく」（福田靖脚本）は、即席めんを開発した日清食品の創業者・安藤百福夫妻をモデルとし、またまた定番の路線に戻った。主演は、演技派女優として評価の高い安藤サクラ。朝ドラは伝統的に「新人女優の登竜門」と位置づけられてきたが、今や必ずしもそうとは限らない。

物語は太平洋戦争中の大阪から始まる。三姉妹の末っ子のヒロイン福子は高等女学校を卒業後、ホテルに就職する。電話交換手として初めて話した相手は、後に夫となる発明好きの立花萬平（長谷川博己）だった。福子の母親役の松坂慶子、姉役の内田有紀、松下奈緒らが周囲を固める中、成功と失敗が交互にやってくる萬平と福子の波乱万丈の人生が、ユーモラスに描かれる。視聴率は二三・八％でスタートし、二〇％台をキープしている。

一八年は明治維新から百五十年の年に当たり、大河ドラマでは、維新の立役者の一人である西郷隆盛を主人公に据えた林真理子原作、中園ミホ脚本の「西郷どん」が放送された。西郷が大河ドラマの主役になるのは、一九九〇年に放送された「翔ぶが如く」以来だ。当時、西郷にふんした西田敏行がナレーターを務め、盟友の大久保利通を演じた鹿賀丈史は薩摩藩の第十代藩主島津斉興役で出演した。

「西郷どん」には鈴木亮平が主演し、大久保役には瑛太が起用された。渡辺謙が島津斉彬を演じたのをはじめ、玉山鉄二（桂小五郎）、小栗旬（坂本龍馬）、遠藤憲一（勝海舟）、佐野史郎（井伊直弼）らが歴史上の人物にふんし、女優陣では黒木華、二階堂ふみ、北川景子、美村里江、松坂慶子、高梨臨、小柳ルミ子らが出演した。

ドラマでは、将軍になる前の一橋慶喜（松田翔太）が西郷と品川宿で出会ったり、二度も島流しの憂き目を見た西郷の流人生活を掘り下げたりした点に、新味を持たせた。主演の鈴木は薩摩藩での下積み時代、倒幕の立役者、郷里の鹿児島での晩年などを印象深く演じ、期待に応えた。しかし、視聴率は初回の一五・四％をなかなか超えられず、平均一二・七％に終わった。前年の「おんな城主 直虎」（平均一二・八％）と同様、朝ドラと並ぶ看板ドラマとしては苦戦を強いられた。

大河ドラマの放送回数はこれまで全五十回を踏襲してきたが、「働き方改革」の波はドラ

マの制作現場にも及び、「西郷どん」から四十七回になった。減った三回分は「西郷どんスペシャル」で埋められたが、これは番組の宣伝色が強く、バラエティー番組ふうの作りも疑問だった。

TBSの「日曜劇場」も好調続く

民放では、TBSテレビがこの年も「日曜劇場」を軸にして好調を維持している。

「日曜劇場」では、一～三月に放送された「99.9刑事専門弁護士SEASONⅡ」が民放の連続ドラマの中で視聴率のトップに立った。松本潤が主演する弁護士ものの続編は、最終回が二一・〇%、平均で一七・六%を記録した。

これに続いて放送された海堂尊原作の「ブラックペアン」は、医学会の派閥争いと利権が渦巻く大学病院を舞台に、二宮和也が「オペ(手術)室の悪魔」と言われる孤高の天才外科医にふんし、人気を集めた。傍若無人な主人公はオペに臨む際、口癖のようにほかの医師を「邪魔」呼ばわりする。菜々緒主演の「MissデビルⅢ人事の悪魔・椿眞子」(日本テレビ)もそうだが、正義感や使命感あふれる主人公より、一見ダークなヒーローやヒロインが目につくのはなぜだろう。同調圧力が強まり、周囲に波風が立つことを恐れる風潮の中で、孤立を辞せず、自分の信念や価値観を貫き通す主人公が受けるのは、「偽悪の時代」と言えるかもしれない。

七～九月に放送された「この世界の片隅に」はアニメ映画化されて大ヒットを飛ばしたこうの史代の漫画を原作にして、岡田惠和の脚本で戦時下の庶民の悲喜こもごもや暮らしを丁寧に描いた。ヒロインのすずには松本穂香が抜擢され、松坂桃李と夫婦役を好演した。

十～十二月放送の「下町ロケット」もヒット作の続編で、最終回の視聴率は一六・六%と有終の美を飾った。池井戸潤原作、福澤克雄演出、阿部寛主演は一五年放送の前作と同じ。佃製作所の佃社長らは今回、新型のバルブシステムの開発にとどまらず、コンバインなど農業用ロボット作りをめざしてトランスミッションの開発に挑む。大企業とベンチャー企業との間で何度も逆境に立たされながら、従業員たちの努力、立場の違いを超えた信頼感で難題を克服していく。山あり谷ありの展開は定番といえば定番だが、新潟県燕市の田園風景でのロケなどはスケールが大きく、理屈抜きに楽しめた。

福澤チームの特徴の一つは異色の配役だ。一七年のヒット作「陸王」では、主人公の足袋メーカー社長(役所広司)を激励するベテラン従業員にエッセイストの阿川佐和子を起用した。「下町ロケット」の続編では、歌舞伎の尾上菊之助やアナウンサー出身のタレント古舘伊知郎、福澤朗らを〝悪役〟に、バラエティー番組の人気者イモトアヤコを天才的な技術者に据え、意外性と新鮮さをもたらした。こうした〝異種格闘技〟はかつてNHKの大河ドラマが得意としたが、今では見る影もない。

「金曜ドラマ」で一～三月に放送された「アンナチュラル」は、「逃げるは恥だが役に立つ」をヒットさせた野木亜紀子が満を持したかのように放つオリジナル脚本だった。不自然な死、つまり変死体を扱う法医学の民間機関を舞台にして、主演の石原さとみ、井浦新、松重豊、市川実日子、窪田正孝らがレギュラー出演した。伏線を何重にも張り巡らし、二転三転する展開でミステリーの要素を打ち出しながら、過労死などさまざまな社会問題も取り込んだ。この上質な社会派エンターテインメント作品は、放送文化基金賞で最優秀賞と脚本賞を受けた。東京ドラマアウォードでは、野木が脚本賞、塚原あゆ子が演出賞、石原が主演女優賞、制作チームが特別賞を受けるなど六つの賞をさらい、ギャラクシー賞優秀賞も受賞した。

同じく「金曜ドラマ」で十～十二月に放送された「大恋愛～僕を忘れる君と」は、若年性アルツハイマー病と診断された女医(戸田恵梨香)と元小説家(ムロツヨシ)の恋愛、別離、再会、結婚を長いスパンで描いて感動を呼び、好視聴率をキープした。恋愛ドラマが激減する中、あえて「大恋愛」という題名を掲げた大石静の脚本は反時代的精神を感じさせた。

TBSでは、「火曜ドラマ」も看板ドラマ枠

として定着しつつある。七〜九月に放送された「義母と娘のブルース」は、キャリアウーマン（綾瀬はるか）が後妻となり、夫（竹野内豊）が病死した後、義理の娘を育てるという物語だった。森下佳子の脚本は四コマ漫画の原作を独自に肉付けし、血がつながらない母子のぎずなをきめ細かく描いた。家庭に入っても、ビジネス用語や以前の口調が抜けない綾瀬の演技が絶妙で、コメディエンヌぶりを発揮した。視聴率は右肩上がりで、最終回は二〇％に迫った。

話題集めたテレビ朝日の深夜ドラマ

テレビ朝日では、水谷豊主演の人気シリーズ「相棒」が一月放送のスペシャル編で三百回を迎えた。この「ｓｅａｓｏｎ17」をはじめ、内藤剛志主演の「警視庁・捜査一課長 ｓｅａｓｏｎ3」、渡瀬恒彦主演の「警視庁捜査一課9係」シリーズを受け継いだ井ノ原快彦主演の「特捜9」、波瑠主演の「未解決の女 警視庁文書捜査官」など中高年向けの刑事ドラマ路線が安定した視聴率を稼ぐ中、新たなヒット作も生まれた。

検事やパイロット、レーサー、外科医などさまざまな職種を演じてきた木村拓哉は「BG〜身辺警護人〜」（一〜三月）で、警備会社のボディーガードに取り組んだ。「GOOD LUCK!!」などで木村と組んできた井上由美子の脚本は、一人息子との意思疎通に悩むような「普通の男」としての側面も掘り下げた。江口洋介や石田ゆり子が共演し、政財界の要人たちも登場する社会派エンターテインメント作品は、一五％前後の好視聴率で推移した。

「ドクターX」シリーズの人気で〝視聴率女王〟の異名を取る米倉涼子は、橋本裕志脚本の「リーガルV〜元弁護士・小鳥遊翔子〜」（十〜十二月）もヒットさせた。サブタイトルにあるように、法曹資格を失ったヒロインが法律事務所の裏方として活躍する。高橋英樹、向井理、小日向文世、菜々緒、勝村政信、林遣都らが演じる弁護士の群像劇だが、世間の常識にまったくとらわれないヒロインのキャラクターは「ドクターX」の大門未知子の変形と言える。最高で一八・一％の視聴率を挙げただけに、テレビ朝日はシリーズ化したいところだろう。

同じ時期、フジテレビで放送された「SUITS／スーツ」も弁護士もので、不振が続く同局としては好視聴率を挙げた。アメリカの人気ドラマを日本に置き換え、織田裕二と鈴木保奈美が一九九一年の大ヒット作「東京ラブストーリー」以来の共演となり、話題を集めた。

テレビ朝日の話に戻ると、夜十一時台の「土曜ナイトドラマ」で放送された徳尾浩司脚本の「おっさんずラブ」（四〜六月）は低視聴率にもかかわらず、男性同士の純愛を描く異色作として話題を集めた。主人公の独身サラリーマン（田中圭）が、上司（吉田鋼太郎）とイケメンの後輩（林遣都）から愛を告白され、奇妙な三角関係がコミカルに描かれた。インターネット上で評判が広がり、東京ドラマアウォードの連続ドラマ部門グランプリに輝いた。この余勢を駆って、二〇一九年夏には映画版が公開される。

さらに、同じく夜十一時台の「金曜ナイトドラマ」で放送された「ｄｅｌｅ」（七〜九月）も意欲作だった。

人の死後、スマートフォンやパソコンに残されたデータは「デジタル遺品」と呼ばれ、個人のプライバシーが詰まっている。生前の契約に基づいて、こうしたデータを削除する仕事に着目した点が現代的で、鋭い。原作の本多孝好が一話完結形式の脚本も手がけ、金城一紀が脚本だけではなくアクション監修としても加わるなど、気鋭の脚本家らが参加した。山田孝之と菅田将暉が正反対のタイプを演じるバディ（相棒）ものの一種だが、現代性とミステリー性にアクションも織り交ぜて、若い世代に支持された。依頼人のゲストとして、作家の高橋源一郎や映画監督の塚本晋也らが出演したことも話題を呼んだ。

テレビ東京が経済ドラマ枠を新設

テレビ東京は四月の番組改編で、「ドラマBiz」と題した経済ドラマ枠を月曜夜十時

台に新設した。経済情報に力を入れる同局の特色を生かしたこの路線は、あまり連続ドラマを見ない働き盛りの男性たちを引きつけられるかどうか、その成否が注目される。

稲田秀樹プロデューサー自身が、制作会社の共同テレビからテレビ東京に引き抜かれた転職組だ。四月から六月まで放送された一作目の「ヘッドハンター」(全八話)は、まさに転職をテーマにして、林宏司が脚本を書いた。同局の経済ドキュメンタリー番組「ガイアの夜明け」の案内人を務める江口洋介が主演し、その右腕を杉本哲太、ライバルのヘッドハンターを小池栄子が演じた。主人公の殺し文句は「あなたの値段、知りたいと思いませんか?」だった。二作目の「ラストチャンス再生請負人」(全八話)は江上剛の原作で、飲食店チェーンの再建に苦闘する元銀行員に仲村トオルがふんした。

十月にスタートした「ハラスメントゲーム」(全九話)は大手スーパーのコンプライアンス室長(唐沢寿明)が唯一の部下(広瀬アリス)とともに、セクハラ、パワハラなどさまざまなハラスメント問題を解決に導く。「きょうの被害者、あしたの加害者。これは理不尽な世の中を生き抜くすべての人の物語である」というナレーションのとおり、企業やサラリーマン社会の現実を直視したのは、社会派エンターテインメント作品を得意とする井上由美子らしい。

井上は同じ時期、WOWOWで放送された「パンドラ　AI戦争」(全六話)も手がけた。画期的な発明で〝パンドラの箱〟を開けてしまった人々の運命を骨太に描く「パンドラ」シリーズはこれまで、がんの特効薬、遺伝子組み換え食品、クローン人間などを題材にしてきた。その五作目では、医療用のAI(人工知能)を開発した医師(向井理)を主人公にして、AIは人類に何をもたらすかを探る。テレビ朝日の「BG」も含めて、井上はこの年に活躍した脚本家の筆頭に挙げられる。

「アンナチュラル」の野木も井上に劣らない活躍ぶりを見せ、日本テレビで十〜十二月に放送された「獣になれない私たち」の脚本も執筆した。新垣結衣、松田龍平、田中圭ら独身男女の仕事上の悩みとともに、どっちつかずの恋愛がリアルに描かれた。

井上と野木は期せずして、NHKでインターネットの影の部分にスポットを当てる意欲作を作った。真木よう子が主演した「炎上弁護人」と、北川景子主演の「フェイクニュース」前後編だ。

リメークは国際展開の新たな潮流

日本のドラマの国際展開をめざす東京ドラマアウォードで、トルコの連続ドラマが二年続けて海外作品特別賞を受賞した。いずれも、日本テレビで放送された坂元裕二脚本、水田伸生演出の社会派ヒューマンドラマである「Mother」「Woman」をリメークしたものだ。

二〇一〇年放送の「Mother」は、小学校の教師(松雪泰子)が虐待を受けている教え子(芦田愛菜)と逃げ、一緒に暮らすストーリーをとおして、現代における母性とは何かをシリアスに問いかけた。このリメーク版はトルコで大ヒットし、二十か国以上に販売された。満島ひかりがシングルマザーを演じた「Woman」(一三年放送)も高く評価され、再びトルコでリメークされた。このトルコ版は一話が二時間、全三十二話という長さだが、これも高視聴率を挙げた。親子や夫婦などの人間関係と、心の機微を丁寧に描く日本流のドラマ作法は、世界に通じる普遍性を持つという成功例だろう。

坂元・水田コンビの三作目に当たる「anone」は、一月から三月まで放送された。ネットカフェで寝起きしている主人公のハリカ(広瀬すず)がひょんなことから、一人住まいの亜乃音(田中裕子)、末期がんを宣告されたカレー店主(阿部サダヲ)、死に場所を探している中年女性(小林聡美)と知り合い、一緒に暮らす。偽札をめぐる動きを縦糸にして、現代社会に潜む負の部分を体現しているような登場人物たちの孤独な魂の遍歴を独特のタッチで描いた。誰にも取っつきやすい内容とは言えず、視聴率は低迷した。しかし、仏カンヌで毎年開催されるテレビ番組の国際見

本市「MIPCOM2018」では、日本のドラマを対象にしたバイヤーズアワードで「Woman」に続いてグランプリに輝いた。この「anone」もトルコでリメークの話が進んでいる。

ドラマが海外でリメークされると、そのテレビ局にはリメーク権販売という形で新たな収益をもたらす。韓国でも盛んな連続ドラマのリメークは、国際展開の新たな潮流となっている。

フジテレビで四月から六月に放送された古沢良太脚本の「コンフィデンスマンJP」(東京ドラマアウォード優秀賞)は、こうした潮流を受けて新方式の海外展開に挑んだ。日本版を意味する「JP」では、コンフィデンスマン(信用詐欺師)のダー子(長澤まさみ)、気が小さいボクちゃん(東出昌大)、したたかなリチャード(小日向文世)の三人組が、悪徳企業の経営者や非合法組織のボスたちからあの手この手で大金をだまし取る一話完結形式のドラマだ。古沢の脚本を基にして、韓国では「コンフィデンスマンKR」、中国では「コンフィデンスマンCN」が同時に制作されるという。

芸術祭賞大賞は「透明なゆりかご」

一七年度の文化庁芸術選奨・放送部門では、脚本家の坂元裕二が「カルテット」(TBS)で芸術選奨文部科学大臣賞、NHKの加藤拓が「眩〜北斎の娘〜」の演出で同新人賞を受賞した。第三十六回向田邦子賞はバカリズムの「架空OL日記」(読売テレビ)、第六回市川森一脚本賞は金子茂樹の「ボク、運命の人です。」(日本テレビ)に贈られた。

文化庁芸術祭賞のテレビドラマ部門では、NHKの「透明なゆりかご」(全九回)が大賞を受賞した。町の小さな産婦人科医院を舞台にして、看護助手の高校生(清原果耶)が妊娠や中絶、死産などに接し、命の尊さを見つめる。沖田×華の原作漫画を安達奈緒子の脚本、柴田岳志らの演出でドラマ化した。優秀賞には、民放ローカル局の二本の単発ドラマが選ばれた。新聞記者の主人公(妻夫木聡)が強風で街路樹の下敷きになった息子の死の責任を追及するうち、意外な真実が明らかになる石井裕也監督の「乱反射」(名古屋テレビ)、佐々木蔵之介と天海祐希が共演した「天才を育てた女房〜世界が認めた数学者と妻の愛〜」(読売テレビ)だ。

一方では、昭和のテレビ史を彩った俳優たちが次々に逝った。TBSの「大岡越前」シリーズなどで親しまれた加藤剛(八十歳)、NHK大河ドラマ「葵 徳川三代」に徳川家康役で主演するなど、テレビドラマや映画で幅広く活躍した津川雅彦(七十八歳)、TBSの人気ドラマ「寺内貫太郎一家」「ムー一族」、NHKの「夢千代日記」などの演技が印象深い樹木希林(七十五歳)、TBSの「渡る世間は鬼ばかり」シリーズなど橋田壽賀子作品の常連だった赤木春恵(九十四歳)だ。

また、いぶし銀の脇役として活躍した俳優の大杉漣(六十六歳)が二月、テレビ東京の「バイプレイヤーズ」(全五話)のロケ先で急性心不全のため急死した。遠藤憲一ら五人の俳優が結集したこの連続ドラマの続編は、ストーリーを変更して放送にこぎ着けた。

脚本家では、テレビドラマ史上に残る名作「私は貝になりたい」を手がけた橋本忍(百歳)、水谷豊が主演した日本テレビの「熱中時代」やNHKの「たけしくんハイ!」、朝の連続テレビ小説「純ちゃんの応援歌」などをヒットさせた布勢博一(八十六歳)、演出家では、NHK大河ドラマの第一作「花の生涯」で演出助手を務めて以来、「草燃える」「徳川家康」「八代将軍 吉宗」など九作にかかわった大原誠(八十歳)がこの世を去った。

平成最後の夏は自然災害が多かったうえ、長くて暑かった。「逝く夏や昭和は遠くなりにけり」という感慨を禁じえなかった。